ＥＳＤ・環境教育研究 (Journal of ESD and Environmental Education) **18**:49-79 (2016)
北海道教育大学釧路校ＥＳＤ推進センター

［シンポジウム報告］

根室地区農協青年部連絡協議会主催・北海道教育大学釧路校 ESD 推進センター共催シンポジウム

根室地区農協青年部×北海道教育大学釧路校
農と学びの連携を考えるフォーラム 2015in 根室

開会挨拶　安達永補（根室地区農協青年部連絡協議会会長）
来賓挨拶　田中宏之（北海道根室振興局局長）

第Ⅰ部：根室地区農協青年部×北海道教育大学釧路校の連携事業 3 年間の歩み
報告 (1) 根室地区農協×北海道教育大学釧路校農村ホームステイ 3 年間の歩み（久保拡伸（根室地区農協青年部連絡協議会副会長））
報告 (2) 教員養成課程における「酪農家民泊体験実習」の可能性（宮前耕史・半澤礼之（北海道教育大学釧路校准教授））
報告 (3) 国民全体がいのちの糧「食」・農業・農村の大切さ・必要性を理解する社会を（近江正隆（株式会社ノースプロダクション代表取締役））

第Ⅱ部：パネルディスカッション「農・地域・大学の新たな連携を考える」
司　会　近江正隆（株式会社ノースプロダクション代表取締役）
登壇者　上田真弓（兵庫教育大学教職大学院准教授）
玉井康之（北海道教育大学釧路校教授・キャンパス長）
安達永補（根室地区農協青年部連絡協議会会長）
宮前耕史（北海道教育大学釧路校准教授）
半澤礼之（北海道教育大学釧路校准教授）
閉会挨拶　玉井康之（北海道教育大学釧路校教授・キャンパス長）

開会挨拶

安　達　永　補
（根室地区農協青年部連絡協議会会長）

本日は時節柄お忙しい中、お集まりいただきまことにありがとうございます。フォーラムの開催に当たり、一言ご挨拶させていただきます。

根室地区農協青年部連絡協議会は、盟友 412 名で成り立っております。その盟友たちで、3 年間、北海道教育大学釧路校との連携を考えながら、色々な活動をしてまいりました。その 3 年間の成果と課題を自分たち青年部だけでなく、関係団体や地域の皆様とも共有し、一緒に解決していくことができればと考え、このフォーラムを開催させていただきました。

フォーラムでは、第Ⅰ部で根室地区農協青年部連絡協議会×北海道教育大学釧路校の 3 年間の連携の取り組みを振り返り、第Ⅱ部ではパネルディスカッションとして農と地域・大学の新たな連携を考えていきます。お忙しい中お集まりいただきました皆様にとっても、このフォーラムが大変有意義なものになるよう、私どももいろいろ考えてまいりました。本日このフォーラムに参加された方はもちろん、参加されていない方々とも、色々お話をする中で、取り組みの可能性とつながりを感じ、未来に向けて進んでいければと考えております。

最後になりますが、関係団体の皆様におかれましては日頃から大変お世話になっております。この場をお借りして御礼申し上げます。このフォーラムが有意義なものになればと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

来賓挨拶

田　中　宏　之
（北海道根室振興局局長）

皆様、こんにちは。本日のフォーラムでは、教育大学の学生さんが、酪農の生産現場で様々な経験を重ねていくファームステイ受け入れ事業について、これまでの取り組みの成果報告をされて、ディスカッションをされるとうかがっております。今の時代、とても大切なテーマ取り上げられた企画と思い、私自身、大変楽しみに参加させていただいています。フォーラムを企画された根室地区農協青年部連絡協議会・北海道教育大学釧路校 ESD 推進センターのみなさまに心から感謝を申し上げたいと存じます。

本日お集まりの皆様には申し上げるまでもないかもしれません。一般に食べることには四つの機能があると言われております。一つは空腹感を満たすこと、二つ目は必要な栄養素をとること、三つ目はおいしく食べること、そして四つ目には食事を通して人とコミュニケーションを図ることでございます。これらの四つの機能につき、最近の子どもたちを見てみると、色々な課題があるということが、例えば厚生労働省の報告などからも指摘がなされているところです。その最も大きな問題として子どもが一人でご飯を食べるという、一人ご飯、孤食という課題があるということも、皆様ご存知かと思います。核家族、共働きの家庭が増えてきたということが背景となって、子どもが一人でご飯を食べると食べざるをえないという状況が生じてきているように思います。

こういった子どもたちが何を食べているのか、内容を見てみますと、スナック菓子であるとか、インスタント食品であるとか、または菓子パンであるとか、そういったものだけを食べるということになっていることが多く、確かに空腹感は満すことはできるかもしれませんが、栄養面ではいろいろと問題があると思われます。また、本当においしく食べることができているのかという問題もあります。そういった子どもたちは何かをしながら食べていることが多いと思われますので、食べていることに集中しているのかということもあると思います。一人ぼっちの食事ということになりますので、そもそも食べることでかえって寂しさを感じるということがあるのではないか。そういった食の問題を一つとりましても、子どもの成長発達の上で悪い影響があるわけです。

その他にも、子どもの食の問題いろいろな課題が指摘をされていますが、そういった問題に対して今後どのようにして適切なアプローチしていくのか。教育的なアプローチという観点で考えていくと、食の成り立ちというものを、本人や親も含め、学校の先生も一緒になって考えていくと。そういった取り組みが、これから一つの大きなアプローチの方法となってくのではないかと考えております。

食の成り立ちということで考えますと、例えば牛乳やチーズ、牛肉はどのようにして作られているのか、そしてそれらがどのようにして店頭に並ぶのか。牛を育てる、草を育てるというところから始めていくという、地道な取り組みをしてはじめて牛乳という製品になるのだというようなことを、生徒が一つ一つの工程をきちんと知る。そして携わった生産者の方の思いや、苦労ということも合わせて知ることで、食の大切さだとか、食べ物を粗末にしてはいけないとか、そういった基本的なところまで理解をしてもらえるのではないか。そしてさらには、「いただきます」という意味を、本当に理解してもらうことにつなげていくことができるのではないか。そういうふうに考えることができます。食の成り立ちというものを通して、これからの食育というものを非常に良い方向に進めていくことができるのではないかと思うわけです。

これから学校現場で子どもたちに食育を行っていくことになる未来の先生たちにとり、食の生産活動に直接触れていくファームステイの経験というものは、何物にも代えることができないものではないかと思います。どうか、本日のフォーラムでは、事業のさらなる発展に向けまして、みなさまから率直で建設的な意見がたくさん出ることを期待したいと思います。3 年前から始まった農協青年部と教育大の取り組みが、このフォーラムを通じ、行政関係機関、団体地域の方々との協力のもと、さらに発展を遂げていきますことをご期待申し上げ、私からのご挨拶とさせていただきます。

本日はお集まりいただきまことにありがとうございました。

第Ⅰ部：根室地区農協青年部×北海道教育大学釧路校の連携事業 3 年間の歩み

報告（1）
根室地区農協×北海道教育大学釧路校
―農村ホームステイ 3 年間の歩み―

久　保　拡　伸
（根室地区農協青年部連絡協議会副会長）

根室地区農業青年部連絡協議会・副会長の久保と申します。中標津で酪農を営んでおります。北海道教育大学釧路校と連携して取り組んでおります農村ホームステイ事業について、農協青年部の立場から概略ご報告させていただきます。お手元のパンフレットと映像を使いながら説明させていただきます。

まずはお手元のパンフレット、3 ページ目をご覧ください（【図 1-1】）[1]。根室管内の生乳生産と根室地区農協青年部の概要が載っているページがございます。われわれ根室地区農業青年部連絡協議会は、根室管内 5 つの JA 青年部から構成され、力を合わせながら食育活動や消費拡大活動等を展開しております。今年の 5 月の時点では、400 名以上の青年部盟友が在籍しており、ほとんどが酪農家です。ページ中ほどにあります通り、根室管内には約 1,200 軒の酪農家があり、年間約 80 万 t 弱の生乳を生産しております。

しかしながら管内の酪農家がどのように牛乳を搾っているのか、どのように食卓に届いているのか、知らない消費者の方が少なくないと思います。そこで酪農家と消費者の距離を縮め、消費者の方々に、生産者の顔が見えるような関係作りにつなげていきたいという思いから、この農村ホームステイ事業の取り組みを始めました。

ページをおめくりください。ここには平成 25 年より実施しております当事業の概略を掲載しております（【図 1-2】）。上段にあります通り、平成 25 年度から 3 年間で 83 名の学生を、延べ 46 名の盟友が受け入れております。下段には事業の流れが載せてあります。学生のみなさんには 2 泊 3 日の行程で参加いただいています。まずは盟友宅で作業体験を中心とする農村ホームステイを行います。実際に搾乳やエサやりなど、酪農家の生活を体験してもらいます。また、根室地区農協女性部にご協力をいただき、乳製品を使った調理実習を行い、飲む以外の牛乳の調理方法も知っていただいた中で、乳製品の大切さを伝え、酪農体験をより深めるものとなっています。

その後、学生たちは宿泊施設で講義を受け、ワークショップを行いながら、農村ホームステイでそれぞれ感じたことを共有し、今回の体験をどう受け止め、活かしていくのかを話し合ってもらっています。ここで 2 泊 3 日の受け入れ事業をまとめた映像を用意しましたので、ご覧いただきたいと思います。なお、こちらは昨年、平成 26 年度に実施したものの中から、みなさんにご視聴いただきます。

【動画】平成26年度北海道教育大学釧路校酪農生活体験受入事業（字幕）

2014 年 5 月 30 日、中標津。本事業では、まずはじめに協議会役員による「酪農に関する事前説明会」を行い、酪農についての基礎知識を学んでいただきました。次に、農

【図 1-1】

【図 1-2】

協女性部による「乳製品を使ったデザート作り」を行いました。「作る」「食べる」で乳製品を身近に感じ、そしていよいよ受入酪農家（盟友）との対面。酪農家宅に移動し、民泊生活体験がスタート。それぞれのご家庭のライフスタイルに合わせた1泊2日の民泊体験を行いました。

2014年5月31日。体験での様々な「気づき」や「想い」を胸に、受入酪農家（盟友）とともに12時に集合。昼食をとりながら体験を振り返り、学生が感想を発表しました。そして今年、平成27年度も。女性部に今年もご協力いただき、北海道教育大学釧路校の学生を、われわれ青年部で受け入れることができました。ここで、われわれ青年部員が3年間で一番記憶に残った参加学生の感想をご紹介いたします。

（学生インタビュー…渡部南さん（4年生、愛知県出身））

（Q1） どうして、北海道教育大学に進学されようと思ったのですか？

（渡部） 家も農家で、自分も農家になるんだとかいろいろ考えたときに、自然体験とか農業とかを伝えられる人間になりたいと考えたときに、それを伝えるのは農家ではなくて先生なのかなと。

（Q2） ご実家は農家さんなんですね！

（渡部） 主に野菜を。他に鶏とか山羊とかも飼っていて。自分の家も子どもの（作業体験の）受け入れとかしていて。民泊体験みたいなものも年に4回位受け入れていて。コースを分けて。愛知県の子どもたちが来ることが多いのですが、中には東京の子どもたちも受け入れることもあったりして。農業をしながら野菜も出荷しています。

（Q3） わりと日常に、そのようなことがあったんですね!!

（渡部） そうですね、小さい頃からそういうことが当たり前で、そのような環境で育ってきたんですけど。でも、小さい時はそんな環境が大嫌いでした。

（Q4） この実習を受けられた動機をお聞かせください。

（渡部） 以前、研究室の活動で民泊体験を浜中町でしたんですね。その時に、農家さんの温かさとか、家族で経営して、暮らしと仕事が一体化している酪農。そんな暮らしがすごく素敵だなと思って。もう一回、そんな人たちと関わりたいと思って参加しました。

（Q5） 体験された感想を聞かせてください。

（渡部） やっぱりとても温かくて。最初はすごく緊張したんですけど。仕事とかも教えてもらったんですけど、全然できなくて。でも、ありがとうとか言ってくれるのも、とても嬉しかったですし。ご家族も、奥さんいて、お子さんも3人いて、おじいちゃん、おばあちゃんもいて。家族でつながっているという感じが私も実感できて。やっぱりいいなって思いました。

（Q6） この体験を今後どう活かしていきたいですか？

（渡部） 先生になったら子どもたちに民泊体験をさせたいってずっと思ってたんですけど、2回目をやって、1回目は感動ばかりで。2回目は、1回そういう感動を受けてからの2回目だったので、じゃあ、これをどのように伝えればいいんだろうということを考えて、自分自身。ただ体験させて、自分たちは牛乳を飲むけど、それまでにはこんな過程があるんだよっていうことだけでいいのかなというのをすごく疑問に思って。

何か、たとえば牛のウンチとか掃除して、飼っている牛を食べるとか、そういう経験をしたことのない子にとっては、何で飼ってる牛を食べるのとか、ウンチを見て汚いとか、普段の生活では考えられないようなことを、酪農家さんの生活では当たり前にしていて。ただ牛乳を作る過程はこうだよって教えるよりも、生きている原点みたいな。本当はそういうことが当たり前なんだよっていうのを伝えたいなっていうのを、改めて今回感じました。

…ちなみに今、渡部さんは大学を卒業され、地元愛知で教員になられたそうです。3年間で、83名の教員を志す学生を、46名の青年部員が受け入れました。受け入れでは、学生だけではなく、われわれ青年部員にも様々な気付きを与えはじめてくれています（動画終了）。

再びお手元のパンフレットを使ってご説明させていただきます。先ほどのパンフレットの最後のページをお開きください（【図1-3】）。受け入れ農家さんからの寄せ書

【図1-3】

き、受け入れ終了後に寄せられた感想を掲載してあります。受け入れ農家さんは初めての経験なので、何をどのように伝えればよいか、不安に思っています。しかし受け入れ後には、感想にもあるように、「酪農の努力や苦労を伝えられた」、「酪農を初めて経験する人の気持ちが分かった」などというように、酪農家にとっても非常に良い経験になったということになりました。学生さんたちに対しては、「今回のこの体験に参加した学生自身で深め、将来子どもたちに伝えていってほしい」といったコメントをいただいております。

私自身、昨年、受け入れをさせていただきました。ホームステイの前は、ワクワクや不安にドキドキした表情を浮かべていた学生さんでしたが、たった1日のファームステイを経験した後、帰るころにはキュッと引き締まった良い表情をしていました。酪農を体験したこと、また受け入れ農家との対話の中で、何か伝わっているものがあるのだろうと受け止めました。また、受け入れた私自身、自分の言葉がこの学生に大きな影響を与えてしまうと考えると、どう伝えたらよいのだろうとすごく考えさせられました。しかし受け入れたことで私自身気付くことも多く、生産者としてしっかりしなければと身の引き締まる良い経験となりました。

昨今の日本の食糧事情を省みると、日本は先進国の中でもトップクラスの食糧消費国となっています。また自由化、コンビニ化が進む中で、食の選択肢は無数に広がり、生産者と消費者の距離も広がっています。だからこそ、今、その距離を縮めていく活動をしなければならないと考えています。本事業も3年目を迎え、80名ほどの学生を受け入れてきました。ファームステイを体験した学生は、きっと、社会に出た後、子どもたちに生きた言葉で食の大切さを伝えていってくれると思っております。

たかだか80名と思われるかもしれません。ですが10年後、20年後このファームステイ事業が食に対する理解を高め、日本の食農事情の変革をもたらす第一歩となる事業となるよう、私たちは今後も手を尽くしていきたいと考えております。また、私たちの思いを地域のみなさまとも共有させていただきながら、今後もご理解とご協力をいただけましたらと考えております。

以上で青年部のご報告とさせていただきます。ありがとうございました。

【注】

(1) パンフレット全編については北海道農協青年部HP（http://jayouth-hokkaido.jp/homestay/）参照のこと。

報告（2）
教員養成課程における「酪農家民泊体験実習」の可能性

宮前耕史・半澤礼之
（北海道教育大学釧路校）

はじめに

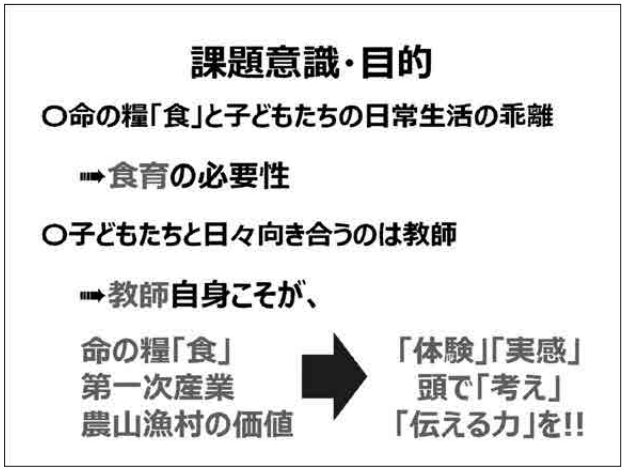
皆様、改めましてこんにちは。北海道教育大学釧路校の宮前と申します。よろしくお願いします。お話しをさせていただくに先立ちまして、学生を受け入れていただいております青年部の皆様、女性部の皆様、事務局の皆様、そしてコーディネートをいただいております株式会社ノースプロダクションの皆様には大変お世話になっております。この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。

我々の方では、二つの資料をご用意しました。一つは「教員養成課程における『酪農家民泊体実習』の可能性」という印刷物（【図】2-1）、そしてもう一つはこの大学の方で出させていただいておりますパンフレットです[1]。この二つをご覧いただきながら、お聞きいただけたらと存じます。30分ほどお時間をいただいているわけですが、われわれ、大学の方では「酪農家民泊体験実習」というように呼ばせていただいております。そういった中で、なぜわれわれがこういったことを考え、何を目的にそうした取り組みをさせていただいているかということを、私と半澤の方からお話しをさせていただきたいと思います。

【図 2-1】

1．課題意識・目的

まず何を目的にしているのかということですが、パンフレットにも同じことが書いてあります。1 枚おめくりいただいたところに書いてあるものです。先ほどからもお話しがありますように、命の糧「食」と子どもたちの日常生活と離れてしまっているところに課題があるとされているわけです。そういった中で、学校においても食育の必要性が叫ばれているわけですが、一方、教員養成という立場から考えてみますと、子どもたちと一番関わりを持っていくのは先生ということになってきます。子どもたちと日々向き合う教師自身こそが、命の糧「食」とそれを生み出す第一次産業、農山漁村の価値ということを身をもって体験、これを実感し、頭で考え、伝えていく力を身に付けていく必要があるのではと考えています（【図 2-2】）。



【図 2-2】

一方、北海道というのは食農生産地、とりわけ道東というのは最大の農業地帯でもあります。北海道教育大学というのは 5 キャンパスありますが、その中で教員養成を行っているのは旭川･札幌･釧路の 3 校です。その中で、道東にある釧路校では、先ほど申し上げましたような教員を養成していくことこそが、その最大の使命、最大の地域貢献であると考えています（【図 2-3】）。

2．実施体制

実地体制です。大学の中では釧路校の教育実習委員会が主催という枠組みで行わせていただいています（【図 2-4】）。そこからプロジェクトチームとして、私と半澤、そして教育実習委員長が学内のコーディネートをさせていただいています。そして農協青年部のみなさんには民泊体験の受け入れ、女性部のみなさんには調理実習、そして事務局といたしまして JA 北海道中央会根釧支所に入っていただいて、全体のコーディネートを株式会社ノースプロダクションにお願いしています。

平成 25 年度から始めさせていただいていますが、大学としては「中期計画」（平成 25 ～ 27 年度）というところに位置付けられています。そして今年度（平成 27 年度）から、これは大変ありがたいお話しなのですが、北海道教育大学と JA 北海道中央会とが連携して取り組む「農業体験連携事業」の一環に位置付けられています。

【図 2-3】

【図 2-4】

３．スケジュール・参加者

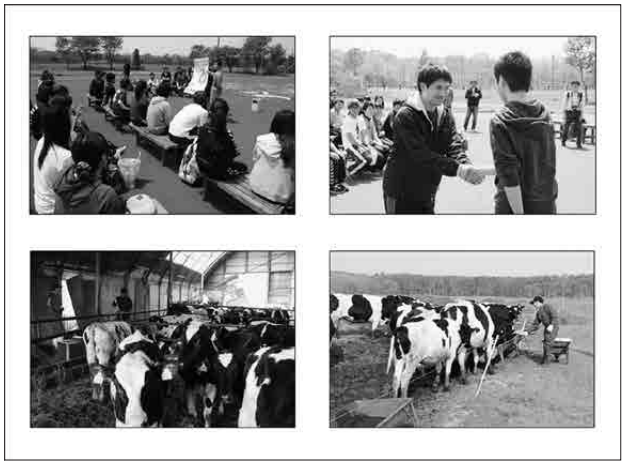
年間通してのスケジュールです（【図 2-5】）。5 月下旬から 6 月初旬にかけての金・土・日曜日の実施ということで、現段階では定着しています。全行程 2 泊 3 日です。1 泊 2 日で民泊体験をさせていただいています。その後、もう一度集まって女性部の方から調理実習のご指導を受けた後、今度は学生だけで合宿をして振り返りをしています。最後にまた受け入れていただいた酪農家さんにももう一度集まっていただいて、発表会をしてという日程の 2 泊 3 日となっております。初年度だけですが、その 1 週間後に学生がもう一度集まって、この体験をどう活かしていくか、食育プログラムを作るということをしました。これは初年度だけで、それ以降は取り組まれておりません。このあたりも今後の課題となって来るのかなと考えているところです。

年間スケジュールとしまして､4 月に受講の案内をして、応募者が多数の場合抽選ということになっています。話し合いの結果、最大で 24 名程度ということでご相談いただいております。5 月にガイダンスをさせていただいて、5 月下旬から 6 月上旬にかけて実施、それから 10 月後半、ちょうど今くらいの時期ですけれども、昨年、一昨年とシンポジウムを開催しました。これは釧路校の ESD 推進センター主催という形で釧路で開催させていただきましたが、今年の場合は本日この場でさせていただいているということでございます。12 月から 3 月にかけ、報告書と先ほど少し紹介しましたパンフレットを作成し､1 年間、およそこうした流れが定着しております。

青年部の方の動画の中でもご紹介いただきましたが、大学生の他、留学生を含む大学院生も参加しています。1 年目には 40 名、2 年目には 19 名、3 年目には 24 名という学生たちが、それぞれ 19 軒、13 軒、14 軒のお宅にホームステイをさせていただきました。

先ほどのムービーの中にもありましたので、ここであまり詳しく申し上げることもないかとも思いますが、最初に牛の生態だとか酪農とはどういった仕事なのかということをご講義いただいています。入村式を経て、下段の写真 2 枚が実際に作業体験をさせていただいている写真です（【図 2-6】）。こちらは上段 2 枚が別のご家庭の作業体験の模様、下段の 2 枚が女性部の方に調理実習をしていただいている場面です（【図 2-7】）。

次の写真は、その後、個人ワークですとかグループワークですとか、学生同士で意見交流をしているところです（【図 2-8】）。そういった作業を経て、こういった形で、受



【図 2-6】

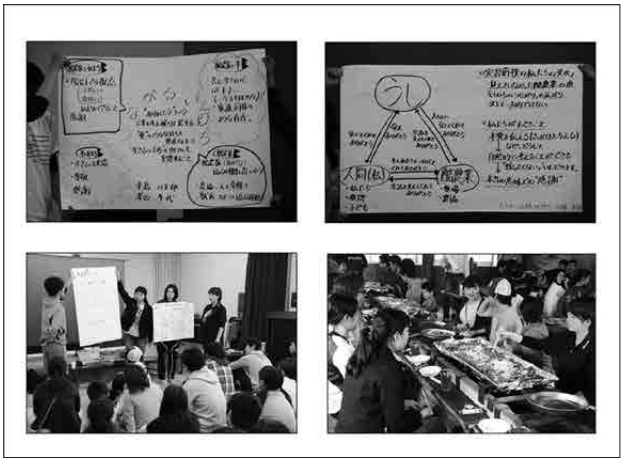
【図 2-7】

スケジュール・参加者

時 期	内 容
4月	受講案内・受付・応募者多数の場合抽選（最大24名）
5月	ガイダンス（スケジュール説明・事前アンケート記入）
5月下旬 ～6月初旬 金・土・日	酪農家民泊体験実習（全行程2泊3日） （1泊2日）「民泊体験」 （1泊2日）「振り返り」＋発表会 ＊初年度のみ1週間後に再度集まり 「食育プログラム」作成（「活用」：今後の課題） ○1年目（H25）5/31～6/2：40名（院6（留1））➡19軒 ○2年目（H26）5/30～6/1：19名（院1（留1））➡13軒 ○3年目（H27）5/29～5/31：24名（院3（留2））➡14軒
10～11月	成果・課題共有のための報告会
12～3月	報告書・パンフレット作成

【図 2-5】

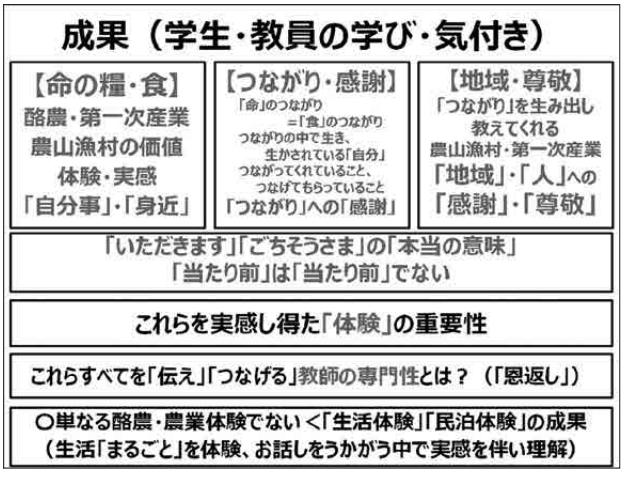
【図 2-8】



【図 2-9】

け入れていただいた方々にもお集まりいただいて、振り返りの発表をさせていただいています（【図 2-9】）。退村式も兼ね、受け入れていただいたみなさんと一緒にバーベキューといったこともさせていただいています。

取り組みについては大学のホームページでも紹介させていただいております[(2)]。また、先ほどお話しさせていただきましたESD推進センター主催のシンポジウムもありますし、これらをまとめて報告という形で文字化させていただいただいた上で[(3)]、できあがりますのが先ほどご紹介させていただいたパンフレットということになります。また、今年度は、私と半澤の方で日本教育大学協会の研究集会等でも報告をさせていただきました[(4)]。



【図 2-10】

4．成果

（1）学生の感想から

学生だけではなく、教員も学ばせていただいております。私たちの学びを「命の糧・食」、「つながり・感謝」、「地域・尊敬」という 3 つのキーワードにまとめさせていただきました（【図 2-10】）。まず「命の糧・食」ということですが、そもそもは、ここが私たち教員の方で想定しておりました取り組みの目的と言いますか、学生に考えてもらいたいと思っていたところです。学生の感想から拾い上げてまとめてみましたが、酪農という仕事、第一次産業、農山漁村の価値といったことを、体験を通じて実感をしたと。こういったことについて頭では理解していたけれども、どこか他人事だった。でも、それが改めて自分事、身近になったという感想がとても多いです。

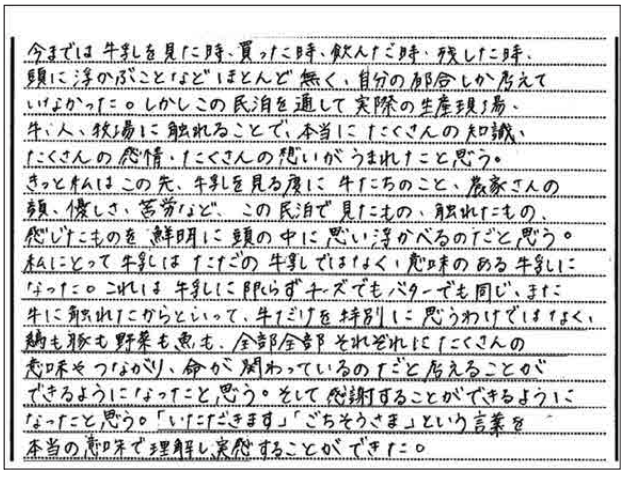
それから二つ目の「つながり・感謝」というところでは、「命のつながり」は「食のつながり」であるということに気が付いた。そうした「つながりの中で生き、生かされている自分」、つまり、自分はそうした「つながり」の中で生き、生かされているのだということに気が付いた。そこから派生して、「つながってくれていること、つながってもらっていること」、自分を生かしてくれている、そうした「つながりへの感謝」ということがキーワードとしてあげられます。

三つ目、「地域・尊敬」というところですが、そうした「つながり」を生み出し、教えてくれるのは、農山漁村であり、そうした地域に住み、第一次産業に従事されている方々である。そうした地域や人々への「感謝・尊敬」、こうしたものが 3 つ目のキーワードとして出てきています。

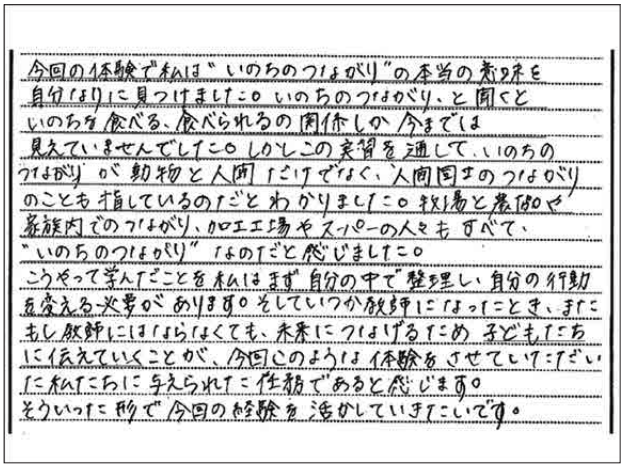
一つ目の「命の糧・食」というキーワードは、われわれが想定していた、3 日間でぜひ学生に考えてもらいた

かったことでした。でも、二つ目、三つ目の「つながり・感謝」「地域・尊敬」というキーワードは、われわれの方でも想定していなかった、新しいキーワードだと思います。こういった気付きを学生がどのようにまとめるかと言いますと、「いただきます」「ごちそうさま」の「本当の意味」を知ったであるとか、自分たちが「当たり前」だと思っていたことは、実は「当たり前」ではなかったということに気が付いたとか、そういった言葉でまとめてくれます。そうした感想が非常に多いです。

そして、こういったことを考えたのは「体験」を通してであったと。やはり「体験」をしないと分からないこともあるんだ、「体験」の重要性というものが分かった。その上で、これらすべてを「伝え」「つなげる」ことこそ、教師の役割なのではないか。では、そうしたことを「伝え」「つなげ」ていくために、教師はどのような力を身に付ければいいのだろうか。「教師の専門性とは何か」ということを、学生たちは考え始めています。それが教師としての自分の、お世話になった酪農家さんたちへの「恩返し」なんだと、そのように表現してくれる学生も多くいます。


今までは牛乳を見た時、買った時、飲んだ時、残した時、頭に浮かぶことなどほとんど無く、自分の都合しか考えていなかった。しかしこの民泊を通して実際の生産現場、牛、人、牧場に触れることで、本当にたくさんの知識、たくさんの感情、たくさんの想いがうまれたと思う。きっと私はこの先、牛乳を見る度に牛たちのこと、農家さんの顔、優しさ、苦労など、この民泊で見たもの、触れたもの、感じたものを鮮明に頭の中に思い浮かべるのだと思う。私にとって牛乳はただの牛乳ではなく、意味のある牛乳になった。これは牛乳に限らずチーズでもバターでも同じ、また牛に触れたからといって、牛だけを特別に思うわけではなく、鶏も豚も野菜も魚も、全部全部それぞれにたくさんの意味やつながり、命が関わっているのだと考えることができるようになったと思う。そして感謝することができるようになったと思う。「いただきます」「ごちそうさま」という言葉を本当の意味で理解し実感することができた。

【図 2-11】


今回の体験で私は"いのちのつながり"の本当の意味を自分なりに見つけました。いのちのつながり、と聞くといのちを食べる、食べられるの関係しか今までは見えていませんでした。しかしこの実習を通して、いのちのつながりが動物と人間だけでなく、人間同士のつながりのことも指しているのだとわかりました。牧場と農協や家族内でのつながり、加工工場やスーパーの人々もすべて、"いのちのつながり"なのだと感じました。こうやって学んだことを私はまず自分の中で整理し、自分の行動を変える必要があります。そしていつか教師になったとき、またもし教師にはならなくても、未来につなげるため子どもたちに伝えていくことが、今回このような体験をさせていただいた私たちに与えられた任務であると感じます。そういった形で今回の経験を活かしていきたいです。

【図 2-12】

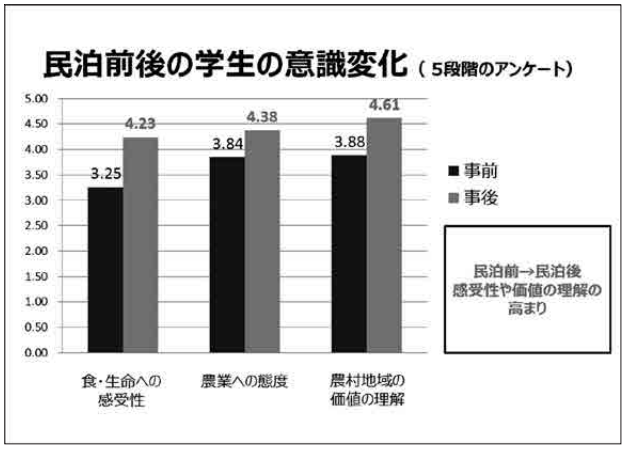
酪農体験や農業体験というのは、学校でも多く取り組まれているものだと思います。けれども、私たちが行なわせていただいている「民泊体験」というのは、単なる農業体験や作業体験ではない、生活「まるごと」を体験させていただきます。一緒にご飯を食べさせてもらったり、お話しもうかがわせていただいたりもします。そうした中で、実感を伴いとても深い理解をさせていただいている、「生活体験」「民泊体験」の成果なのかなと思います。

字が小さくて申し訳ないのですけれど、学生の感想の中から、代表的なものを持ってきてみました（【図 2-11】【図 2-12】）。

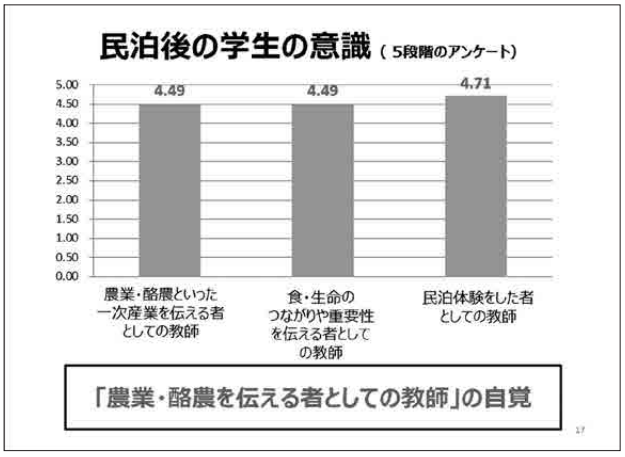
こういった形で、学生たちはまとめてくれています。まさに先ほど私が紹介させていただきました三つのキーワード、それらすべてが盛り込まれているように思います。今、お話しさせていただいたことを、今度は学問的に、半澤の方からご報告させていただきます。

（2）アンケート結果から

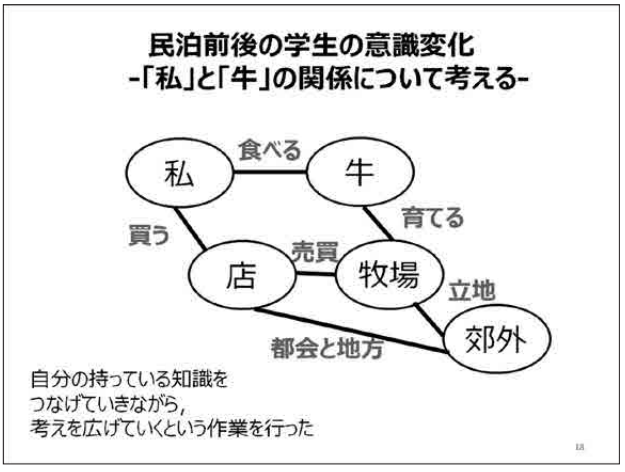
半澤の方からご報告させていただきます。民泊体験に行く前と、行った後で、学生に対してアンケートを行っております。どのようなアンケートを行ったかと申しますと、「食・生命への感受性」はどれくらいありますかということ、それから農業に対してどれくらい肯定的な態度を持っていますかということ（「農業への態度」）、そして最後に農村地域についてどれくらい価値があると思いますかということ（「農村地域の価値の理解」）。これらについてのアンケートを行いました（【図 2-13】）。



【図 2-13】



【図 2-14】



【図 2-15】

5 段階とありますけれども、5 がより肯定的、よりポジティブな回答となります。見ていただくと分かると思いますが、行く前と行った後では値が異なっております。行く前と行った後での学生の平均値を比べてみたもので、小数点以下まで出ておりますけれども、行く前はだいたいアベレージは 3 です。4 の手前くらいのものだったのが、行った後では 4 を超えていると。つまり、「食・生命への感受性」、「農業への態度」、「農村地域への価値の理解」が、より高まったということが見て取れます。

それから、もう一つアンケートを取っています（【図 2-14】）。これは酪農体験をすることによって「農業・酪農を伝える者としての教師」としての自覚がどれくらい生まれたかということについて、三つの観点、つまり「農業・酪農といった第一次産業を伝える者としての教師」、「食・生命のつながりや重要性を伝える者としての教師」、「民泊体験をした者としての教師」といった観点からアンケートを行いました。これも 5 に近ければ近いほど、そうしたことをより強く自覚したということを示しています。

ご覧いただいています通り、結果としてかなり 5 に近い値が出ています。以上から、「農業・酪農を伝える者としての教師」というものの自覚が表れているということが見て取れます。先ほどのムービーにもありました、女の子のインタビューからもお分かりになったと思いますが、これは別の形、そうしたことが数字となって表れています。

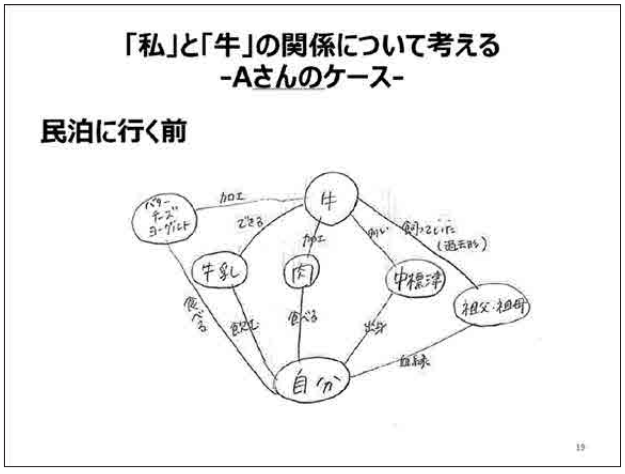
（3）コンセプト・マップから

それからもう一つ、学生たちの学びや経験を捉えるための取り組みを行っています。どういうことをやっているかと申しますと、民泊体験に行った前と後とで、学生たちの中で「私」と「牛」との関係についての考え方がどのように変わるだろうか、といったことを考えています（【図 2-15】）。

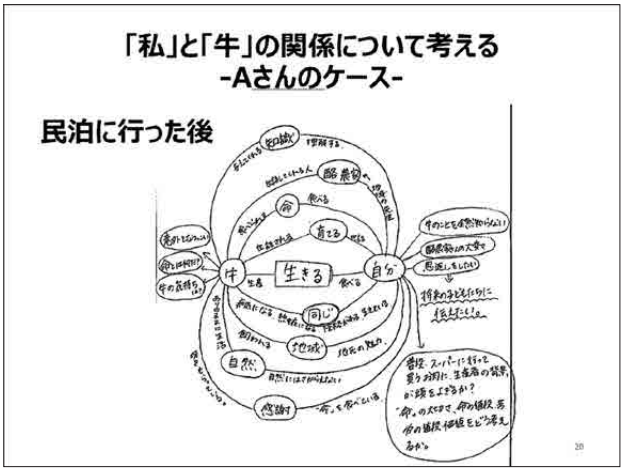
まず、学生には白紙の紙をお配りして「私」と「牛」と書いてもらいます。そして、あなたがここから連想するもの、思い浮かべるものを、どんどん書き入れていってくださいとお願いします。たとえば、「私」と「牛」であれば、「私」は「牛」を「食べる」。そして、「私」は「店」からそれを「買う」。そして「牧場」でそれが「売買」される。そして「牛」は「牧場」で「育て」られる。「牧場」は「郊外」にあって「店」は「都会」だけど「牧場」は「郊外」という形で、最初に「私」と「牛」というキーワードだけ与えて、そこからいろいろと連想を広げていって書いてもらうということをしました。

これは、自分の持っている知識をつなげながら考えを広げていくという作業になります。するとどういうことが起きるかと言いますと、知識がより深い、思いがより強いとたくさんのことが書けるようになるということになるわけです。知っていないと連想できないわけですから、知っていることが多ければ多いほど、様々な事を連想することができます。これを民泊体験に行く前と行った後の 2 回、書いてもらいました。そしてこれが A さん、ある女の子ですけれども、女性のケースを紹介させていただきたいと思います。

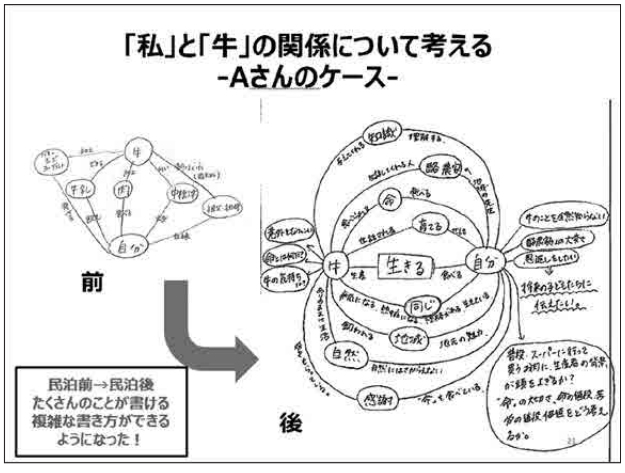
A さん、民泊体験に行く前は、このような形で連想を行いました（【図 2-16】）。「私」と「牛」の間には「肉」があって、「バター・チーズ・ヨーグルト」、「牛乳」、「中標津」、「祖父・祖母」という連想で、このような図を書



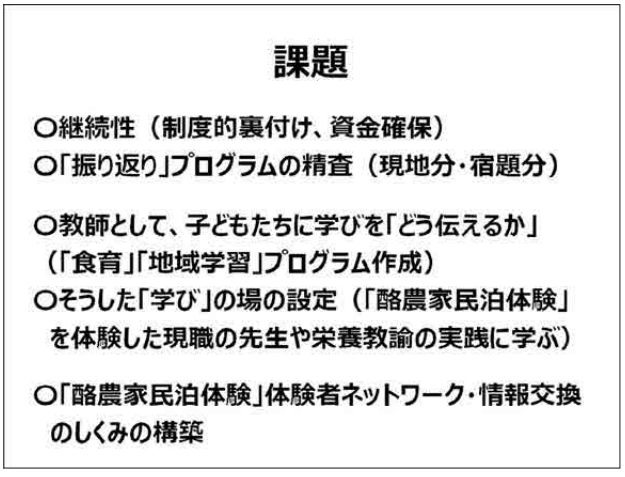
【図 2-16】



【図 2-17】



【図 2-18】



【図 2-19】

いたわけです。行った後にどうなったかと申しますと、先ほどと比べると、よりたくさんのことが書けるようになっているということが分かります（【図 2-17】）。つまり、民泊体験の後ではたくさんのことが書けるようになった。

あとは、見ていただいてもお分かりになるように、より複雑に書けるようになったということが分かります（【図 2-18】）。これは先ほど申し上げた通り、知識がないと、あるいは想いがないと様々なことが書けないわけですから、行く前と行った後とでは知識が増えた、学びがより深まった、それから想いがより強まった。経験・体験によってさまざまなことを書けるようになったということを表しております。先ほどの感想だけではなく、数値によるアンケートとか、こういった図示したもの、これによって本校の学生にとり、酪農民泊体験が重要なものであり、貴重な体験になっているということをうかがうことができるわけです。ここまでが私の報告です。最後に宮前の方から、お願いしたいと思います。

５．課題

最後に今後の課題です（【図 2-19】）。まず継続性についてです。制度的裏付け、資金確保と書いてありますけれども、3 年間取り組みをさせていただいてきて、これからどうなるだろうかと心配しておりましたが、ありがたいことに、先ほど申し上げました教育大と JA 北海道中央会との農業体験連携事業ということで正式に位置付けていただきました。制度面でも、また資金の面でも、とりあえずの継続性は確保できたのではないかということで安心をしております。

次に、最初の方で、2 泊 3 日の後、1 週間ほど後にもう

一度学生だけで集まって、教師になった時に体験をどう生かすかという課題について、食育プログラムを作ったことがあるというお話しをさせていただきました。そのあたりの問題。教師として、子どもたちに学びをどう伝えるか、たとえば「食育」や「地域学習」プログラム等といったことについての勉強をしてみるとか、そういった学びの場を設定する必要があるのではと考えています。

そういう学びの場を設定していく上で、たとえば酪農民泊体験をされた現職の先生であるとか、栄養教諭の先生であるとか、そういった方たちが、ご自身の体験や経験を踏まえどのような実践をされているのか、そういったことを学ばせていただける場はないか。また、「酪農家民泊体験」もこれまで 80 名ほどの学生が体験させていただいているわけですが、卒業者も含め、そうした民泊体験の体験者のネットワークとか、そういったものをつくって情報交換をしていく仕組みなど構築していくことができないかと考えています。卒業してすぐ教壇に立っている卒業生もいるわけですから、そういったことも可能なのではないのかと思います。

このような取り組みを今後も続けていただけるということで、われわれとしては非常にありがたく考えています。今後とも青年部の皆様、女性部の皆様、受け入れていただいているご家庭の皆様にはとてもご負担と申しますか、ご迷惑をおかけすることになると思いますが、本当にありがとうございます。今後とも、ご指導をいただけましたらと幸いと存じます。どうぞよろしくお願いします。ありがとうございました。

【注】

(1) パンフレット全編については北海道教育大学「酪農家民泊体験実習」HP（http://www.hokkyodai.ac.jp/distinctive/research/project/rakunou.html）参照のこと。

(2) 北海道教育大学 HP「酪農家民泊体験実習」（（http://www.hokkyodai.ac.jp/distinctive/research/project/rakunou.html））参照のこと。

(3) 添田祥史・近江正隆・神田房行・宮前耕史・白鳥千咲・梶りな・安達永補・小幡泰弘・今泉博 2014「ESD 推進センター主催公開シンポジウム報告『命の糧「食」の価値を感じ・考え・伝えるために―教師を対象とした酪農家民泊体験実習の試み』」北海道教育大学釧路校 ESD 推進センター『ESD・環境教育研究』第 16 巻第 1 号、および宮前耕史・大森享・半澤礼之・近江正隆・伊藤美実・佐々木貴子・玉井康之 2015 宮前・大森・半澤・近江・伊藤・佐々木・玉井 2015「ESD 推進センター主催大学祭連携企画公開シンポジウム報告『命の糧「食」の価値を感じ・考え・伝えるために―教師を目指す学生を対象とした「酪農家民泊体験実習」の可能性―』」北海道教育大学釧路校 ESD 推進センター『ESD・環境教育研究』第 17 巻第 1 号。

(4) 宮前耕史・半澤礼之・内山隆 2015「『食育』指導力向上のための『酪農家民泊体験実習』プログラムの開発」平成 27 年度日本教育大学協会研究集会、半澤礼之・宮前耕史 2015「『酪農家民泊体験実習』プログラムを通じた大学生の知識構造の変化と将来展望形式」日本教師教育学会第 25 回研究大会。

報告（3）
国民全体がいのちの糧「食」・農業・農村の大切さ・必要性を理解する社会を

近　江　正　隆
（株式会社ノースプロダクション代表取締役）

はじめに

皆様、こんにちは。株式会社ノースプロダクションの近江です。よろしくお願いいたします。このような貴重な場をご準備いただきました、会長はじめ根室地区農協青年部連絡協議会の皆様、宮前先生、半澤先生、玉井先生、その他教育大学の皆様には本当に感謝を申し上げます。私は事業コーディネーターという立場です。コーディネーター、つまり段取りをしたり、当日までの準備をしたりする役割ですけれども、今までの話を聞いてきて、私は何かやってきたかなという思いです。コーディネーターという形で関わらせていただいていますが、青年部の方たちの力と先生たちの熱い熱意のもとに事業が進められてきたのだと、改めて思いました。

資料の方、お手元に用意させていただきました（【図3-1】参照）。字が細かくて申し訳ありません。こちらの資料と、それから先ほど教育大学の宮前先生の方からご紹介いただいた、「教育フィールド研究8」というパンフレットの7ページに、事業コーディネーターからのメッセージということで文章を書かせていただいております（【図3-2】参照）[1]。このあたりを見ていただきながら、話しを進めていきたいと思っております。

【図 3-1】

酪農家民泊体験実習コーディネーターからのメッセージ

株式会社ノースプロダクション
近江（おうみ） 正隆（まさたか） 代表取締役

＜プロフィール＞
1970年東京生まれ。19歳で単身北海道に移住。酪農・畑作・林業・漁業を経験。現在企画会社ノースプロダクション代表取締役、また十勝管内で農村ホームステイを推進するNPO法人食の絆を育む会の理事長、内閣府地域活性化伝道師、北海道地域づくりアドバイザーなどを務める。また、著書「だから僕は船をおりた」（講談社）がある。

現在、この国の全労働者人口における一次産業従事者の割合は、わずか４％。１００人中４名。つまり２５人に１人が農林漁業に従事しているという計算だ。興味を持ちぼくが生まれた時代（４３年前）を調べてみた。その割合は２０％。つまり５人に１人。そしてぼくの親が生まれた時（７５年前）は、なんと４８％。つまり仕事に就いている人のほぼ２人に１人が農林漁業に従事していたことになる。

きっと昔は、多くの国民が家族や親戚の中に農林漁業者がいたんだと思う。つまり農林漁業・農山漁村が自分事として捉えることが可能な身近な存在だった。でも人口が首都圏・大阪や名古屋などの大都会に集中し、世代が次に変わるごとに自分事に考えられる立場の人たちは少なくなり、いまのような状態になってしまった。きっとこの割合はまだまだ減少しかねない…。

生きていくために欠かせないものがある。どんなに強くなっても、どんなに　賢くなっても、どんなに偉くなっても、水や空気、そして食べ物がなければぼくらは生きていけない。そしてそれは、農山漁村で育まれている。農山漁村はそこに住む人たちだけに留まらない社会全体として大切な場所。でも残念ながら、大切な場所だと思うことをイメージできるような身近な存在でなくなってしまっていることが、様々な社会のねじれを生む要因をつくり、社会不安を作っている大きな原因ではないだろうか？だから敢えてしなければならないこと。それは国民みんなが農山漁村を身近に感じ、自分たちの家族が住むようなイメージを持ち、愛着をもって自分事として感じてもらうようになるための仕組づくりだと思う。そのための有効的な手段が「農村ホームステイ」であり、仕組づくりに向けては、農と学びの更なる連携が不可欠だと感じている。

【図 3-2】

１．「食」「農」をめぐる現状と課題

冒頭の振興局長のお言葉にもあったと思います。農業は大事です。食も大事です。これらを育む農村がなければ、おそらく根室地区の農村地域だけではなく、社会全体が成り立たないということは紛れもない事実だと思います。実は私、十勝の浦幌町というところに住まわせていただいていますが、出身は東京です。東京に生まれました。最近 45 歳になりました。19 歳の時、北海道に憧れて、本当に単純ですけれども、北の国からというドラマにはまってしまいまして、自然への憧れだけで北海道にやってきました。

学生時代まで東京にいたわけですけれども、正直な話、東京にいた時は、別に農業、農村、農家さんが大事だという認識はありませんでした。これっぽっちもありませんでした。でも今は違います。それを取りまとめる農協という組織も含めて、まさしく自然の中で生きる一番の力で協同、助け合い、助けられるという協同精神というのは何よりも大事だと思います。何より農業や農村というものがなければ、私のふるさと東京も立ち行かないということを強く感じるようになりました。

なぜ私はそのように価値観が変わったのか、考えてみました。おそらく先ほどの学生さんのコメントにもありましたけれど、私も同じく色々な体験、小学校、中学校の学校の授業の中で、少なからず食育ですとか、社会の時間に農業の大切さは学んできたと思います。けれども価値観として心に落ちてはいなかった。でも北海道に来て、色々な体験をさせていただいて、色々な素晴らしい思いを持つ、まさしく青年部の皆様のような方々とつながって、そこで初めて自分事として価値観が変わっていったように思います。

パンフレットの冒頭のところで書かせていただいていますが、少し調べてみました（【図 3-2】）。現在、この国の全労働者人口における第一次産業従事者の割合は、たった 4 パーセントです。農業がなければ、どう考えても私たちは生きていくことはできないです。社会が立ち行かない。でも、農業に従事している方たちの割合は、「第一次産業」と言われながらも、たった 4 パーセントしかありません。では、私が生まれた 45 年前は何パーセントだったか。調べてみると、約 19 ～ 20 パーセントあったそうです。つまり 4 人に 1 人という計算になります。では、さらにさかのぼって私の父が生まれた世代、生きていれば 75 歳になります。75 年前までさかのぼって調べてみると、約 50 パーセントありました。つまり、それほど遠い昔ではなく、顔を見ることのできる世代の中で、父母の世代、祖父母の世代、そのくらいの時には、2 人に 1 人が大事な農業を営んでいたということです。

その時代を想像してみました。私のふるさと東京に住んでいる人も北海道に住んでいる人も、全部ひっくるめて、この国に住んでいる人ほとんどが、農業という営みについて、やりがいであったり自然の厳しさであったり、直接自分が農業に直接携わっていなかっとしても、つながりの中で誰かから聞いた話だったり、色々なことが思い浮かんだのだと思います。農村という言葉を聞いて、おそらくそのころは思い浮かべられる風景があったのだと思います。農家さんという言葉を聞けば、おそらく顔の見える誰かがいたのだと思います。農業・農村といった存在が、それだけ自分事だったということです。それが今ではたったの 4 パーセントです。

先ほどお話しさせていただいたように、当たり前のことです。食が大事、農業が大事。誰がどう考えても大事です。けれども、私もそうでした。なかなかイメージがわかない。つながりがない、体験がない。だから当たり前のことが当たり前として伝わりにくくなっているというのが、今の様々な農業・農村をめぐる課題や問題の一つの根本的な原因ではないか、と思います。

２.「伝わる」ための教員と農業者・学校と農業者団体の連携・役割分担

そういった状況の中で、先ほどのホームステイ、宮前先生の発表の中でありました。私も少し使わせていただきたいと思いますが、4 ページの下の部分。先生方ご自身も学び・気づきがあったという、成果のところであります（【図 2-10】）。一番下のところ、単なる酪農・農業体験ではなく、「生活体験」「民泊体験」の成果ではないかというまとめられ方をしていらっしゃいます。私も自分の体験を踏まえて考えてみますと、何か見たり、聞いたり、知ったりではなくて、まさしく自らやること。それも、ただ作業をするだけというのではなくて、そこには人が住んでいて、その想いにも触れるという部分での、生活に飛び込むというファームステイという手法。これが、学生さんもそうですし、私自身もそうでした。もしかしたら、変わらなければいけない、変えなくてはいけないということを生み出す、何よりも大きなきっかけなのかなということを、今日の発表を受けて感じたところでもあります。

今回は、青年部の活動としてホームステイ、青年部の皆様のお宅で学生たちが生活体験をするという事業を、青年部の方たち、まさしく協同組合のもとに組織立てられている青年部の皆様がされました。今までも青年部の方々、様々な教育活動を展開されてきたと思います。子どもたちを畑に呼んだり、牧場に呼んだりして、学びの場も提供しながら、ご自身で伝えたいと。様々な食育活動を展開されてきたと聞いております。

この事業にコーディネーターという立場で関わらせていただいて、そこで何か仕事らしい仕事をしたのかなとも思いますが、事業を組み立てながら、一つ見えてきたことがあります。それは何かと言うと、農業者、青年部の方々は、場を提供するということに関しては環境も整っており、何より財産を持たれている。でも、伝えるということに関しては、青年部の方々はプロではないということです。

では、伝えるということについて誰がプロなのかということを考えてみると、それはやはり一番のプロフェッショナルはやはり教員、先生なのではないかということです。資料をご覧ください（【図 3-1】）。私なりにまとめて表現が書いてありますので、少し読ませていただきます。中段③の「教員との連携」というあたりです。

教員は自ら「答え」を出さないで、子どもたちから「答え」を引き出す。教員は常に子どもたちに主体性を持たせ、自発性を子どもたちに与え、伝えるプロフェッショナルである。そしてそこから子どもたちが主体的に学び始める。伝えることは教員でなくても誰でもできる。しかし、伝わること、（伝えることではなく）伝わることは簡単ではない。「子どもたちの主体性を引き出す」。そのことが、こどもたちに伝わるためには重要である。いのちの糧「食」やそれを育む大切な営み「農業」の価値を伝えて仕組を作っていくためには、教員・学校と農業者・農業者団体の連携、役割分担が必要不可欠である。

こんな風にまとめさせていただきました。今までのように、青年部の方々が伝えるというところまで、全部自分たちでやりきるのも大事だと思います。でも、繰り返します。伝えることは一方的ですから、自分が話をすれば伝えたことになります。けれども、それが本当に相手に伝わるかということを考えると、「伝える」ことで「伝わる」ことがプロである先生方と連携することで、役割分担として、よりお互いの力を発揮し、成果として伝わっていくのではないか。そんなことを何となくイメージしながら最初関わらせていただきました。先ほどお話を聞きながら、改めてこうしたことを確信しました。

場を提供する、機会を与えるのは農業者の方々。子どもたちに伝えるのは、先生方。今回は先生方ではなく、教員養成課程の学生さん。全員ではないかもしれませんが、これから先生になろうと思っている学生さんたちです。彼ら彼女たちは先生になって、体験を通して感じ考えたことを伝える立場になっていくのだろうと思います。「伝わる」ということを考えた時に、やはりこれからはそのような役割分担、連携や協働ということを考えていくことが必要なのだと思います。そういう意味でも、場を提供する青年部、伝える人たちを育んでいく教育大学との連携は、大きな意味での先進事例になっていくのではないかと改めて感じさせていただきました。

３．農村ホームステイの可能性

国の方でも色々と考えている部分もあります。先ほど、文科省の方の食育関係の会議の委員もしているとご紹介いただきました。そういったこともさせていただいている中で、先ほどの繰り返しにはなりますが、食の大切さ

というものは何か理解しやすいところがあるのかもしれませんが、これは農の大切さともイコールだと思います。食の大切さイコール農業の大切さであるはずなのに、農という言葉がでた瞬間、イコールではなくなってしまう人たちがいるのも、残念ながらまぎれもない事実です。そこをどういう風に変えていくか。生産者・生産者団体と先生、先生を養成していく大学とが連携していくということが本当に必要だと思いますし、私が関わらせていただいた会議でも、そうしたことがいつも話題に上がっていました。

その部分を、黄色いところで表現させていただきました（【図 3-1】）。「日本再興戦略（H25.6 閣議決定）では、『農林漁業』を経験した国民の割合を 5 年後に 35 パーセントを目標とし、農林漁業への理解増進を図っていくと明記した」。またまだまだ表面には出てきていないですけれど、子どもたちに対してのこのような体験が大切である。作業体験だけではなく、農村部で暮らし、つながりを作るということが何よりも大切だということで、国会等でも話題になっているように思います。すべての国民に対し、農村漁村での体験の機会を設けていくという法案が通るという情報もいただきました。この国が抱えている農業・農村に対する理解を育むということに対して、それだけ手だてが限られていることなのだと思います。その大きな手だてとして、このホームステイ、国から注目され始めているということも事実です。

いずれにしても今日改めて思いますのは、皆様も感じられたと思いますし、事業コーディネーターという立場で参加させていただいきながら、私も感じました。農業の担い手である青年部の方たちが、このような発信をされている。まさしく次世代を担う子どもたちに伝えていく教育者を育てる教育大学が、その青年部の方々と連携している。そうしたことが、根室で行われている。本当にすごいことが、この根室で行われている。今日初めて聞いたという方もいらっしゃるかもしれませんが、色々な方たちがこの取り組みに関わる中で、この取り組みがさらに発展していってほしいなと思います。ご清聴ありがとうございました。

【注】

(1)　パンフレットについては北海道教育大学「酪農家民泊体験実習」HP（http://www.hokkyodai.ac.jp/distinctive/research/project/rakunou.html）参照のこと。

第Ⅱ部：パネルディスカッション「食・地域・大学の新たな連携を考える」

パネリスト	上田　真弓	兵庫教育大学教職大学院准教授
	玉井　康之	北海道教育大学釧路校教授・キャンパス長
	宮前　耕史	北海道教育大学釧路校准教授
	半澤　礼之	北海道教育大学釧路校准教授
	安達　永補	根室地区農協青年部連絡協議会会長
進行	近江　正隆	株式会社ノースプロダクション代表取締役

（近江）皆様、改めてよろしくお願いします。司会を務めさせていただきます、株式会社ノースプロダクションの近江です。よろしくお願いします。ここからの時間、終了を 15 時 50 分あたりでイメージしておきます。だいたい 80 分程度、「食・地域・大学の新たな連携を考える」というテーマのもとに、パネラーの皆さんと進めて参りたいと思います。よろしくお願いします。

第Ⅰ部のところで青年部からの説明、そして大学からの説明がございました。まずそれをお聞きになっての感想をと思いますが、上田先生、そして玉井先生の方からお話しをうかがえればと思います。まず上田先生ですけれども、現在は兵庫教育大学大学院の准教授としてご活躍をされておりますが、前職は外務省、その前は文科省にお勤めでした。色々なご経験をされて、本日はゲストというお立場でお呼びさせていただいております。自己紹介もしていただきながら、ご感想をうかがえましたらと思います。

（上田）こんにちは、上田真弓と申します。よろしくお願いします。今回この場にお呼びいただいているというのは、二つの意味で呼んでいただいていると思っています。一つは文部科学省に勤務していたという経験。もう一つが、10 月から今の職場に移っているのですが、兵庫県の丹波市というところで農業を生業としている夫がおります。一緒に住みながら自分の目指している仕事もできる、両立できるということを 10 月からしています。その両方の理由からお呼びいただいているのだと思います。

感想の前に、自分がどうしてこういうところにたどり着いたのかということをお話しさせていただきます。大きな経験が二つありました。一つは、かなり遠回りなのですけれど、大学時代、ケニアというアフリカの国とのパートナーシップを考えるというサークルをやっていました。ケニアには 3 週間くらい滞在したのですが、それから数か月たって、私、牛乳が大好きなんですけれど、もう一つ大好きな飲み物があって、コーヒーが大好きなんです。コーヒーを飲んでいる時に、色々な物がやっと結びついた。自分の目の前にあるコーヒーが、さっきの学生さんの感想と重なるのですけど、単なる飲み物ではない。そこに携わっている人、私の場合はケニアですけれど、どれだけの人が携わっているのかということが、やっと体感できたという経験があります。このことにすごくショックを受けました。

20 歳の時だったのですけれど、それまで一生懸命勉強してきたのに、自分が社会とどう関わっていて、社会にどう生かされているのかということを一度も考えたことがなかったと、その時初めて思い、気付いたことにすごいショックを受けました。そこから自分が受け取ってきた情報とか、受けてきた教育って何だったのだろうとい

【写真 1】会場風景

【写真 2】上田真弓氏

うことを考えました。それが大きな転機になって、今につながっています。

二つ目が、実は文部科学省に入省する前、私が育ったのは愛知県ですけれども、愛知県の教育 NPO で働く機会があり、そこで学校と地域をつなぐコーディネーターということをさせていただきました。そこで地域の会社の社長さんとか、色々な生業をしている方たちとお会いする機会があって、「こんなにたくさん、自分の先生がいたんだ」ということに初めて気付きました。ケニアから始まった私の構想というものが、地域の身近なところに学び場がたくさんあるということに落ちてきたというか、近づいていったという二つの経験があります。

それ以来、人づくりと地域づくりということがすごくつながっているものだということをテーマに、お仕事をしてきています。そのようなつながりの中で、実は近江さんともお会いする機会があり、遅ればせながら 4 年前に酪農家民泊体験をさせていただきました。それは、文科省としても体験が大事だとか言っているけれども、自分がそのことを伝えるための経験が不足しているということ。これは今もすごく痛感していて、少しでもそのヒントを得たいと、酪農家宿泊体験をさせていただきました。そのような遠回りしてきた私の体験や学びというものを、今日の前半にご説明いただいた取り組みの中で、北教大の学生さんは得ることができるというのは、すごくうらやましく感じました。

近江さんのお話しの中にもありましたが、食育、食の大事さとか、農業の大事さとか伝える、子どもたちに伝わるということは簡単なことではないと思います。それは学校の先生だけでできるものでもなくて、学校の先生と一緒に取り組んでくれるパートナーがいるということに、すごく意味があるのだと思います。それがセットになっているこのような取り組みが、すごくうらやましいというか、ある意味、これから文科省が目指していく方向の先取りをしている取り組みだと思います。

プライベートなことを少しお話しさせていただきますと、私の夫は農業をしているのですが、出会ったのは、実は地域づくりや人づくりを学ぶ場でした。彼がまだ数年前に就農したばかりの頃だったのですが、自然の厳しさと向きあう中での学びが多くて、その豊かさによって自分もまただんだん豊かになっていくのを感じる。そしてまた、このことを誰かに伝えたいと、そういう思いで住んでいる丹波市の生涯学習審議会に自分で手を挙げたりしています。そういう経緯で、農と学びと教育という

【写真 3】近江正隆氏

のは、必ずしもそこに携わっている人たち同士が近いというわけでもないとも思いますが、私も夫も、している仕事、手段は違うのですけれど、大事にしたいと思っているのは同じ、一緒だと思っています。それぞれ仕事を頑張っています。

（近江）ありがとうございます。上田さんに初めてお会いしたのは 4 年前くらいだと思います。そこから色々なことがあったのだと思います。私は東京に生まれて東京に育ちましたが、大自然にあこがれて北海道に来ました。変わり者という自覚もありますが、上田さんは国の中枢、国の大事な役職を担われて、そういった大事なところのど真ん中にいらっしゃりながらも、農家をされている旦那さんと結ばれて、今は兵庫の方に住まわれることになったという選択。上田さんのような方がいらっしゃるということに、びっくりしました。

上田さんには後ほどまた、文科省という立場からご発言いただきたいと思います。

続きまして、玉井先生にお話しをうかがいたいと思います。同じく第Ⅰ部の話をお聞きになって、宮前先生、半澤先生の発表という部分もありますけれど、上田さんからも体験の大切さというお話もありました。改めてこの取り組みをお聞きになって感じられたこと、自己紹介も含めてよろしくお願いします。

（玉井）北海道教育大学釧路校のキャンパス長をしております、玉井と申します。日頃から学生たちが地域に入らせていただいていること、体験活動等でお世話になっていることに改めて御礼申し上げます。本校は地域協働型教員の養成ということを一つの柱にしております。ですので、地域に根ざす、地域に入るということをキャンパス全体で進めております。そのことにつきましてはまた

【写真 4】玉井康之氏

後でお話しをさせていただきますが、教員養成課程ですので、まずは私も学校教育と、この体験的な活動がどのように関係しているのかということを、お話しさせていただきます。

3 人の先生方がお話しされたこと、まさにこれはもうご報告の中でもありましたように、この体験というものを通じて、地域、学校、生活、生活の中でも食、それから農業といった産業、これらを全部結んでいるということです。ここはやはり、すべての人が言っている基本です。そのことを踏まえて、私の方からは学校教育という面からお話しをさせていただきます。

学校教育の中にも学年があって、1 年生から生活科があって、総合的な学習であるとか、教科という学習に進んでいくわけですけれども、体験的な活動というものは、一般的には感動的な体験活動から、より専門的な活動に入る。我々が、普段の日常の中で経験しないようなことを経験する。子どもの場合は、命とか、それから動くもの、生命、そのようなものにとても興味を持ちます。それから食べること。これは子どもにとってとても嬉しいことです。

こういったところから体験活動に入るということは、1 つの感動をもたらす。その感動力から体験活動が進むということですね。ここは非常に大事なところです。それをだんだんと発展させていくと、見ることの技術とか、農業の技術、それから食糧を加工する技術等といった、そういった専門的な体験に移っていくのですが、まずは学校教育で一番大事なのは、そこで感動した、嬉しかった、楽しかったということが、やはり出発点だということです。そういう意味をもっているわけです。

それから二つ目。体験的な活動、最近では総合的な学習等、よく言われますが、農業というものは、たとえば社会科であれば産業という単元があります。産業の中には第 1 次産業、第 2 次産業、第 3 次産業とありますが、農業は第 6 次産業、全部をトータルにつなげることができます。理科という科目をとっても、植物の生態、栽培というものが入ってきます。生活科の中では植物を育てるという活動が入っています。家庭科の中では食品を加工したり、技術科ではそれに関わる技術を学ぶ。国語は見たもの、感動したものを表現しようという単元になります。道徳の中では命を大切にしようといった命との関係、生命を育てるということが入ってきます。特別活動では仲間づくりとか共同体験、奉仕体験、ボランティアなどが入ってきます。その中で地域に貢献するとか、様々な活動をみんなで一緒にやるとか、そのような仲間づくり、人間関係づくりを進めていくということが入ってきます。つまり、こういった体験活動といったものには、学校教育の中に入っている様々な教科や教育活動が全部入っている。そこに意義があるということです。

最近は言語表現能力が特に大事になっています。自分が体験したことや、体験したことのよさを相手に伝えよう、それを表現してみよう。特に日本の教育の中では、相手に伝えようとか、相手の言っていることを受け止めようというような、コミュニケーションとかプログレスとかいうことが、新しい教育活動として大事な柱になってきています。体験したことを振り返りの中でみんなで語り、そのことを発表したりということが出てきました。そういう中で、自分がみんなと一緒に学んだことを共有化することで、みんなに伝えよう。表現をしながらそこにコミュニケーションが行なわれる。そういうことが、教育活動のなかで非常に大事になってきています。

その上で食育ということですが、今、食育という言葉をよく耳にします。先ほどのお話しの中でも、食育の中には農業も入っているということがありました。実は学校教育の中で食育というと、どうしても食べることという教育になってしまいます。漢字そのまま、「食べて育てる」「食べて育つ」ということですが、本来的に言うと、「食育」ではなく「食農教育」にしないと、食育というものが狭い意味で受け取られて、学校教育のなかに押し込められていくという傾向があります。消費者として安全安心な食物を選び食べるという教育も大事ですが、実は生産、農業と結びついているということからすると、生産から加工もして、そして調理して食べ、健康な体を作っていく。これらが全部結びついていかなければならない。食育とよく言われますが、どうしても狭くなってしまう。

生産や農業ということと結び付いていかない。本来的に言うと、「食農教育」ということにしないと、どうしても狭くなってしまう。栄養教諭が食品のエネルギーバランスを考えて健康な食事をしましょうというだけですと、どうしても学校教育の中にとどまってしまう。地域が見えない、生産が見えないということになってしまいます。食べ物がもともと農業、漁業というところから来ているということを理解させるためには、食と農を結びつけるということがやはり必要です。

それからもう1点、民泊をさせていただいて、生活そのものを見させていただいています。これは後でもお話ししますけれども、教員養成にとっても、とても大事だと思います。学校では集団宿泊活動といって、宿泊ということを教育活動の中に入れています。集団で泊まるということで、ネイパルのように宿泊体験施設などに泊まるのですけれど、生活をともにするということで、その人たちの間に親密な関係を作ることができます。その中で相手を理解し、自分が今まで付き合ったことのない、違う人たちの様子や考えであったりを受け止めることができる。これは学校教育の中でも大事な教育活動になります。

情報化社会が進むと同質性が強くなってきて、身近にはいるけれども考え方や価値観の違う人よりも、遠くのネット上の、自分の考えに賛同してくれる人だけと付き合うという、同質性が強くなってきてしまう傾向があります。その同質性を越えて、身近な人、今まで付き合ったことのない、考えや価値観の全然違う人と一緒に話すことによって、そこで異質共生ということを学んでいく。こうしたことは、学校教育でも大事な課題になっています。そこで一緒に泊まって生活をともにしながら、話しをしたり相手の生活や考え方を共有したりしていくということが、教育的にはとても大事です。

釧路校では地域協働型教員養成ということを目指しています。そのような立場から、教員養成課程としてこの取り組みをどうとらえるかということについては、また後でお話しさせていただきます。以上で終わります。ありがとうございます。

（近江）ありがとうございました。上田先生、そして玉井先生からご感想をいただきました。上田先生からは、ご自身の実体験を踏まえた体験の大切さ。玉井先生からは異質共生、考え方や価値観の異なる人を受け止めるという、もしかしたら、それは青年部の皆様にとっても、民泊を受け入れるというご経験、自分たちとは違う立場の人をホームステイさせるという中で、何か気付きみたいなものがあったのかなとも想像されます。また、青年部の方々は、活動として玉井先生のおっしゃる「食農教育」を進めてきたとも言うことができるとも思います。「食育」ということだけではなく、「農」も入れた「食農教育」。お二人のコメントを受けて、安達さん、ご感想いかがでしょうか。

（安達）お二人の貴重なご意見を聞かせていただき、まことにありがとうございます。青年部活動でこの取り組みをさせていただいて3年になります。実は私、個人的にも色々な受け入れもしています。日頃の仕事もしている中で他人を受け入れるということも大変なのですが、酪農を知ってもらいたいというところからスタートした活動です。まず体験というものは何なのだろうと考えた時に、良いところだけをとる体験では、深く知ることができないのではないか、と。きっかけにはなるかもしれませんが、本質を見つめることはできない。あまり良くないかなと思っています。なので、ありのままを見てもらって、ありのままの生活を体験してもらうということをしています。

酪農を知ってほしいという思いの中でやり始めましたが、修学旅行生等を受け入れた時に、「みんなにとって食事ってなんなの？」と尋ねた時に、「食事は作業です」と言われた一言が忘れられなくて。「どういうふうに食事をしているの？」と聞くと、「一人で食べればいいし、何時でもお腹がすい時に、何でもいいので食べます」と。僕たち生産者の思いというものは何も伝わっていないんだなということを、本当に感じました。先ほど近江さんのお話しにもありました。食を作っている人間だからこそ食を伝えることができるのと、「伝える」ということと「伝わる」ということは全然違うんだということなのですが、「伝える」ことはできたかもしれないけれど「伝わ」っていないかもしれない。でも、ありのままの体験をしてもらうと、感じることができるんですよね。何かをやって、良いも悪いも感じた上で、その人の体験になっているんだということを、改めて感じさせていただいています。

酪農家というのは、もともと閉鎖的で、生産だけしていて、それで良いという考え方もあったのかもしれないですし、忙しくてそれができなかったかもしれない。けれど、たった4パーセントしかいない農業者から何も伝わっていないというのは、やはり国民にとってもダメなことだし、生産者にとってもダメなことだと思います。やはり、農業体験を通じてみんなが笑顔になれるという農業作りが大事なのではないのかなと思います。

【写真 5】安達永補氏

【写真 6】会場風景

（近江）ありがとうございます。先ほど宮前先生が報告の中で学生の感想を読まれて、改めて読んで私も涙が出そうになりました。もう一度学生の感想を改めて受けて、感じられることがあればお願いします。

（安達）正直、泣いていました（笑）。今年の教育大の受け入れ事業の際に、受け入れた青年部員に最後集まってもらって、振り返りの言葉をみんなで共有するということをしました。青年部員というのはまだ経営者ではなくて、まだ仕事を覚えたり、数字のことを勉強したりというような団体なので、自分がこうしていきたいという、明確な哲学がまだ決まっていません。でも、自分とまったく違う、先生の卵たちを受け入れることによって、感想の中でもありました。体験をしていない人の気持ちが分かったという感想等もあって、生産者にとっても気付きというものがあったと思います。それが本人、生産者にとっても自分の可能性を高めることにもなっているし、自分の哲学というか、生き方を考える最大のチャンスになっているのではないかと思います。「食」を通じて理解し合えるのではないかなと思います。

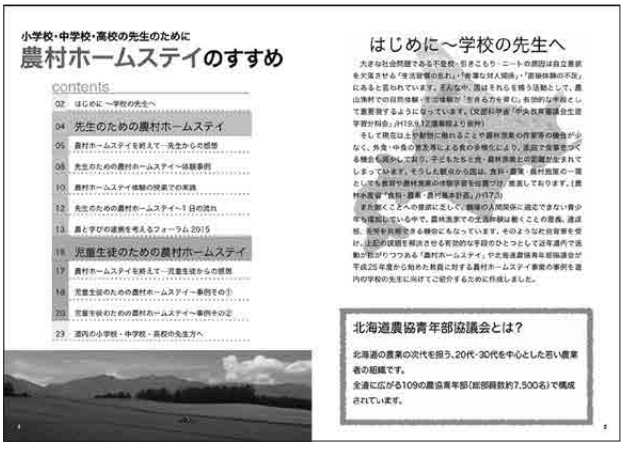
（近江）ありがとうございました。久保副会長のお言葉にもありました。青年部の方々は場を提供して、「伝える」「伝わる」という部分では学生たちが一方的に学んだのかな、気付きがあったのかなと思っていましたが、そうではなくて、受け入れる側にも何か気付きや学びがあったのだと、そのように思います。そうしたお話をうかがい、胸に響くものがありました。大学サイドのお話しの中でも同じようなことがあったと思います。学生だけではなく、成果として教員自身も学び、気づいたということが非常に同じく印象的でしたが、そのあたりを踏まえて、半澤先生。上田先生や玉井先生の言葉、安達さんの話を聞いて、何か感じることがあればお願いします。

（半澤）私は札幌出身で、東京、京都を回って今、釧路にいます。3 年目です。比較的都市部に住んできた人間なので、このようなお仕事をさせていただく中で新たな気付きがたくさん生まれております。泊まってはいませんけれども、安達さんのお宅で去年、作業体験をさせていただきました。1 週間、腰が痛くて立てなかったんですけれど。みなさんのお話しをうかがって、似たようなお話しになってしまうかもしれないのですけれど、感じたことを一つお話しさせていただきます。

それはつくづく、学びというのはコミュニケーションだということです。勉強とか学び、学習というと、教える人と教わる人、先生と生徒というような一方向的な関係性を想定することが多いですけれど、実生活、私たちが生きている生の現場で、一方向的な関係性というのはほとんどあり得ないわけです。今までのお話しの中にもありましたけれど、本校の学生を受け入れていただく中で、学生はもちろん様々なことを学んでいると思いますが、そういった体験の中で、受け入れてくれた農家さんたち、そしてそういったものをコーディネートする我々も非常に多くのものを学んでいるということが言えると思います。

教科書に書かれているある知識を一方向的にただ伝授するのではない、共に何かをするという体験。だからこそできる「学び合い」という活動になるのではないかと思います。私は大学の人間で、本学の学生は先生になる学生が多いと思いますので、先生というのは何かを一方向的に教えるのではなく、お互いに学び合っていくということがとても大事だということ。このことを、体験を通じて分かって、気付いてもらえれば嬉しいと思います。

【図 4-1】



【図 4-2】

先ほど安達さんの方からもお話しがありましたが、酪農家さんにもさまざまな学びがあるのだということで、気付きや学びをお互いに共有しながら高め合っていくということ。このことが、今回のシンポジウムの重要性にもつながっていくのではないかと思います。

（近江）ありがとうございました。体験をされた学生、受け入れ先のご家庭の方々だけでなく、今回のこのシンポジウムを通じて、みなさんとも学びを共有できたらありがたいと思います。半澤先生のお話しの中にもありました。ともに何かをするということを考えた時に、寝食をともにするこのホームステイ、ファームステイというものは、同じ農村での体験ということにはなりますけれど、単なる作業体験ではない、やはり何か特異性を感じるところです。

数がなかったのでみなさんにお配りすることはできませんでしたが、こちらの冊子、農業農村組合ネットワーク、JA 北海道中央会と道経連、道教委、道とで作られている協議会でまとめられたものです（【図 4-1】）[(1)]。その中で、実は「農村ホームステイのすすめ」ということで、小学校中学校高校の先生のために、今回のここでの取り組みは教員養成課程、先生を志す学生さんたちへのアプローチですけれども、もう一方で、ここに書かれております。私も少し協力をさせていただいているのですけれども、北海道農協青年部では、実は広域で、現職の先生たちに対して同じような取り組みをされています。つまり地域の先生を地域の農業者が受け入れるという取り組みを、こちらも 3 年前から取り組まれています。ページを 1 枚めくっていただきますと象徴的なことが書かれています。ホームステイの可能性を掘り下げるという部分で読ませていただきます（【図 4-2】）[(2)]。

不登校、引きこもり、ニート。私も東京にずっと住んでいたらニートだったのかもしれません。先ほど 4 パーセント、20 パーセント、50 パーセントという話をさせていただきました。では 75 年前、すべての人たちが農村とつながっていた時代、不登校、引きこもりやニートといった問題が今の時代ほどあったのかというと、クエスチョンマークがつきます。やはり都会と地方がかい離してしまって、農山漁村へのつながりがなくなってきてしまった。こうしたことと同時に、そういった問題が国の問題としてクローズアップされて来たということなのかなと思われるわけです。

そういった問題が起こる原因として、文科省中央教育審議会生涯学習分科会の議事録からの抜粋として、三つ書かれています。「自立する意識を欠落させる『生活習慣の乱れ』」、「希薄な対人関係」、「直接体験の不足」。これらが起きるとこのような不登校や引きこもり、ニートといった存在に至ってしまうのではないかと考えられています。何が言いたいかと申しますと、先ほど食や農業の大切さ、食と同時に農業・農村・農家さんの大切さを伝える部分で、まさしく先ほどもパネラーのみなさんからもありました、コミュニケーション。ただの体験ではなく一緒に何かする、一緒にご飯を食べる家族のようなつながりの中で、食の大切さを本質的なところで伝える先生が育っていくのだと思います。けれども、それだけではなくて、そのようなアプローチが、今、都会では解決策がなかなか見つかりにくくなっている不登校や引きこもり、ニートといった問題、今一度、子どもたちが農山漁村で家族のようなつながりを持つことができる、そういったホームステイというものを仕組み化すれば、そうした問題も解決されるのではないか。そのようなことを

考えています。先ほども触れさせていただいた、すべての国民にそのような体験の機会を提供していくというのも、そのような裏付けがあるのだろうと思ったりもするのですが、改めてこのホームステイという切り口、家族のようなつながりを作るということが、そうした社会問題を解決する糸口になるのではないかとも思われるわけです。都会が解決できない、未来の担い手である子どもたちが抱える課題を解決する力が農村にあるということを発信していった時、一体誰が否定をするだろう。そんなことを改めて感じました。

さて、食や農業、命の大切さを伝えるだけではない、今お話ししたようなこともありますし、それ以外にも、もしかしたらあるかもしれません。根室地区農協青年部と北海道教育大学釧路校が連携しての農村ホームステイ、酪農家民泊体験実習。ホームステイや民泊体験のまた違う可能性について、若干方向性といいますか、角度を変えて考えていきたいと思います。

先ほど宮前先生が発表されたパワーポイントの資料の中で、成果、学生たちの学びや気付きという部分ですが、宮前先生もお話しされていました（【図 2-10】参照）。最初は大学サイドとしては、北海道で北海道の先生を養成していく以上、命の糧・食、農業はじめ第一次産業、農山漁村の価値、大切さを伝えたいという思いで始まったものだと。ところが副産物と言ってよいのか、ねらっていたところなのか、一つは、体験をした学生の中から、「つながりへの感謝」の気持ちが芽生えたという声があったと。つまり「命のつながり」は「食のつながり」であること、「つながりの中で生き、生かされている自分」、つながってなければ生きてはいけない、自分だけでは生きていけないということに気付いたという声があったと。そんな思いを持っていたら、もしかしたら引きこもって自分ひとりでという価値観はなくなるかもしれません。先ほどお話しさせていただいたことは、もしかしたらこの中に凝縮されているのかもしれません。

もう一つは、右です。「地域・尊敬」。地域というものへの認識が深まる、人への認識が深まる。「地域・人への感謝・尊敬」というものについて、少し掘り下げていきたいと思います。このことについてお話をいただく前に、まずは学生さんのコメント、インタビュー動画をご覧いただきたいと思います。先ほど久保副会長の発表の中で、愛知県出身の渡部さんのインタビューをご覧いただきました。自分の家は農家だったけれど、それが嫌だった。でも、それがなぜ教育大学に行こうと思ったのかというと、農業という営みの素晴らしさを伝えるのは、もしかしたら農家自身ではなく先生なのではないかと考え、彼女は北海道教育大学釧路校という、地域に根差した特色のある大学を目指され、結果として地域に戻って先生になられたということでした。

もうお一方、こちらも昨年、平成 27 年度に参加された学生さん、伊藤さんです。伊藤さんのコメントを少しお聞きいただいた上で、この取り組みが、食や命の大切さだけではなく、地域というものを学ぶ一つのきっかけになっている。このあたりを掘り下げてまいりたいと思います。実は伊藤さん、地元・中標津のご出身ということでもあります。まずは伊藤さんのコメントをお聞きください。

（学生インタビュー…伊藤美実さん（2 年生、北海道中標津町出身））

（Q1）この実習を受けられた動機をお聞かせください。

（伊藤）地元ということもあり、将来役に立つ知識とか、地域に密着してみるっていう…。学校外に出ることがあまりないので、実際にやってみたいと思って、参加させていただきました。

（Q2）地元・中標津町のご出身ですが、このような体験をされたことはありましたか？

（伊藤）実際にということはなかったですね。農業試験場に行かせていただいたことはあったんですけど。牛を間近でみたりするということはなかったですね。

（Q3）体験された感想を聞かせてください。

（伊藤）もちろん、ミルクをあげたりするというのはとても楽しいんですけど、搾乳とか、大変な部分がたくさん見えて。牛に蹴られたりとか。餌押しとかはちょっとしかやってないのに、重たくて腰が痛くなったりして、大変だなっていう一面も見れてすごく勉強になりました。

酪農はすごく大変で、お年寄りがやるというイメージをもっていたんですけれども、すごい若い方が多くて。地域を担う人たちは、やっぱり若い人たちなんだなっていうことをすごく感じました。

想像していたこととぜんぜん違って、今まで牛は遠い存在と思っていたんですけど、人間と同じように病気にもなるし、すごく身近というか。食とか、食べ物とか、お肉とか牛乳というのは、近いというか。近いけど食べていて。矛盾していますが、不思議な感じがしました。ありがとうという気持ちで食べることがで

きました。

（近江）半澤先生のお話しの中にありました、コンセプト・マップ。私と牛の関係性の変化をとらえるという試みの中で、体験前よりも体験後のほうがより複雑になったというお話しがありました。実はその時、画面に出てまいりましたコンセプト・マップを書かれたのが実はこの伊藤さんだったということです。

色々注目してみたい部分があります（【図 2-17】参照）。もちろん食や命の大切さが分かったということもありますが、「牛」と「自分」の間に「生きる」「生産」「食べる」というのが書いてある一番上、「育てる」の上の「酪農家」というところです。「酪農家」さんは「牛」にとっては「世話をしてくれる人」だと。一方、「自分」から「酪農家」へと引っ張っている線、ちょっと読みにくいですれども、ここに伊藤さんは「地域の先生」と書いています。つまり「酪農家」は自分にとって「地域の先生」であると。伊藤さんは今日はいらっしゃらないので分かりませんが、想像するに、おそらく自身が先生になったというイメージの中で、酪農家を一緒に子どもたちに伝えていくパートナーとしてとらえたのではないか。地元・中標津出身で教育大学に学ばれている伊藤さん。その伊藤さんが、体験を通してそのような思いを持たれたこと、地域というものをより意識するようになったということは、印象深い、象徴的なことのように思います。

そういったことを踏まえて、宮前先生、先ほどまとめられていた中にも命や食のありがたみ、感謝だけではなく、「地域・尊敬」ということもありました。そのあたりを少し詳しく、そしてこの伊藤さんのコメントについて、さらに掘り下げてしゃべっていただけたらと思います。よろしくお願いいたします。

（宮前）ありがとうございます。伊藤さんは地元・中標津町のご出身の、今年 3 年生です。酪農家民泊体験実習には去年、2 年生の時に参加してくれています。中標津高校を卒業して、教育大に来てくれました。伊藤さんが中標津のご出身だからといって本日とりあげさせていただいているわけではありません。これまでも我々、研究会や学会等で酪農家民泊体験実習について発表や報告をさせていただいてきていますが、その中でも A さんのケースということで、その成果を決定的に示すものとして紹介をさせていただいています。その A さんのケースが、実は中標津出身の伊藤さんでした。彼女が中標津の出身なので、本日はその事例をというわけではなく、たまたまそうなったということです。

今回、改めて伊藤さんの描かれたコンセプト・マップを見返してみました。皆様もいくつか、比べていただきたいと思いますが、民泊に行く前ですと、「自分」と「牛」とをつなぐ線の真ん中に「肉」とあります。「牛」が「加工」されて「自分」はそれを「食べる」という構図です。その右側を見ますと、「中標津」には「牛」が多い。その「中標津」は「自分」の「出身」であると。その程度しか連想されていなかったのが、民泊に行った後のコンセプト・マップになると、描く量としてこれだけ増えます。半澤先生の方から民泊体験の後になるとたくさんのことが描けるようになったとご紹介いただいたわけですが、伊藤さんも、民泊体験の後にはたくさんのこと、複雑な描き方ができるようになっているわけです。

その中で注目したいのが、一つは牛に対する共感的な理解に基づく感謝とでも申しましょうか。「牛」という字はこのスライドでいうと真ん中のあたりにあります。「牛」って「意外と人懐っこい」生き物なんですね。じゃあ「牛の気持ち」ってどんなだろう。あるいは「牛」と「自分」との間に「生きる」とあります。それと「自分」と「同じ」く「病気になったり熱中症になったり」、「性格があったり個性がある」。「生きている」。「生きている」という意味では「自分」と「同じ」じゃないか。「牛」と「自分」は「生きている」という点で同じじゃないかというイメージが出てきます。それが、牛目線と言いますか、民泊に行く前ですと、「牛」が「加工」されて「自分」が「食べる」という、簡単にたったそれだけだったのが、牛への共感的な理解と言いますか、「牛」というのは「自分」と「同じ」く「命」があって、私はそうした「命」ある「牛」を「食べる」存在なんだという、牛に対する共感的な理解に基づく「感謝」というのが一つだと思います。

それともう一つ。地元ということももちろん関係あると思いますが、実はそこに「酪農家」という人たちがいたんだという気付きが示されています。民泊体験の後のコンセプト・マップ、ここに「牛」と「自分」との間には「酪農家」という存在がいたんだということが出てきます。で、「自分」の地元中標津にはそういった「酪農家」という人たちがいて、その人たちが「自分」と「牛」との間をつなげてくれている。つまり自分の地域について、「酪農家」という人たちがいる地域なんだということが新しく目に入ってくる。そして民泊体験で「自分」にそういったことを教えてくれたのは「酪農家」さんだったんだ、地元の人たちだったんだという気付き。

その上で注目したいのが、このスライドの右、「自分」のところから右に広がる部分です。「自分」は「牛のことを全然知らな」かった。地元・中標津のことなのに。「酪農家さんの大変さ」も全然知らなかった。そういったことを教えてくれたのは地元の酪農家さんだった。「生きる」、「同じ」の下の方に「地域」とありますが、そうした人々のいる「地域」、「地元の魅力」に気がついた。「地元の魅力」に気が付いたのは、「地域」の人たちが教えてくれたからだ。そうしたことも含めてすべて「将来子どもたちに伝えていきたい」。「地域」や「地元の魅力」を「伝えていきたい」、「恩返しがしたい」。

先ほどもご紹介させていただきました。「恩返し」という言葉は、他の学生の感想にもけっこう多く出てきます。「地域」や「地元の魅力」を「子どもたちに伝えていく」ことは、「地域」に対する「恩返し」なんだというわけです。地域の人間の一人として、教師として地域にどう貢献していくことができるか、役に立っていくことができるか。地域の人間の一人としての教師として、どう地元や地域に貢献していくかということを、学生たちは考え始めているんだと思われるわけです。今回伊藤さんのコンセプト・マップを改めて見返してみて、そんなことを考えています。

（近江）ありがとうございます。地元の魅力を伝えたいという部分に関しては、地元出身ということで、正直、伊藤さんの特異性みたいなものもあるのかなとも思いもしますが、ただ、伊藤さん以外の学生でも、地域というものに向き合うきっかけになったということは、まぎれもない事実だと思います。宮前先生に再度お聞きしたいんですけれども、地域に向き合うとよく言われます。今回は学生さんたち、民泊体験というきっかけで地域というものを感じ、そこに向き合うきっかけにもなったのかなと思いますが、改めて、ではなぜ地域というものと向き合うという必要があるのか。宮前先生も地域に根差した教員養成ということも考えられて様々な取り組みをされているのだと思いますが、そういった観点から、なぜ先生は地域と向き合い、あるいは地域に根差すことが必要なのか、そういったところで一言、いただけたらと思います。

（宮前）先ほどの上田先生のお話しや、玉井先生のお話しの中にもありました。地域学習をするという中で、身近な地域というところを取り上げての体験活動というのもありますし、私が常々考えておりますのは、学校の先生というのは、今まで学力をつけていかに都市部に送り出すかということを目標に、そのために学力をつけて大学に送り出す。でも、大学に進学したら子どもたちは地元に帰って来ない。そういった方向を、計らずとも目指してしまっていたところがあるように思います。けれども、そうではなくて、これからは、地方創生ということも言われております。将来の地域の担い手、地域人材を作り出すのが学校や先生の役割ともなっていきます。

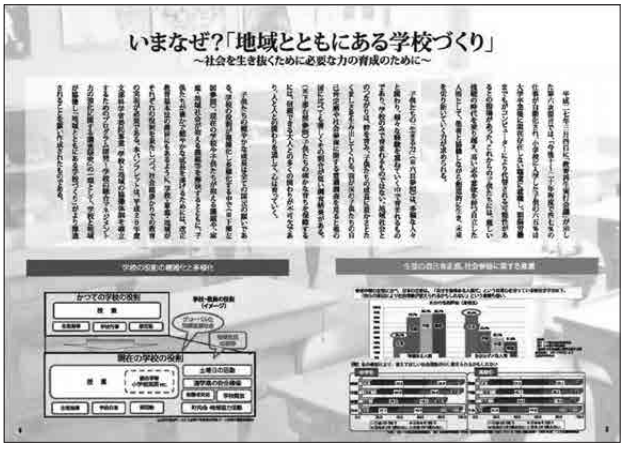
そのためにはやはり、地域ってすごいなということを、地域の方々や地域の人々のもつ専門的な知識、専門性に直に接する中で、地域や地域の人々のすごさということにも気が付いてほしい。これを実感して、それを子どもたちに伝える。そのことによって、子どもたちも自分の町ってすごいんだということに気が付き、子どもたちにも、自分はこういう風に地元、地域に貢献したいんだということを考えてほしい。ですから、そういった子どもたちを育てていくためには、やはり先生ご自身も、そういった地元ってすごいんだということを実感してほしいと、考えているところです。

（近江）ありがとうございます。お話を聞いていて、地方の中核都市にある進学校といったイメージをもちました。勉強頑張れ頑張れ。勉強を頑張って進学、いい大学に入っていい会社に入ってということが、一つの価値観としてあったのだと思います。私は全然違う価値観で動いていましたけれども、一般的に進学校で目指されてきたのは、勉強して頑張って、勉強ができるのならここにいたらもったいない。東京に行け、札幌に行け、中央に行け、活躍しろ。もちろんそれはそれで正しいことなのかもしれませんけれども、今、宮前先生の言葉を聞くと、もちろんそういうこともありながら、でも、もう一方は学校の役割は地域の担い手を育てるということにあるのではないか。地方創生というものが、今まさしくクローズアップされているところなのではないか。そんな話だったのではないかと思います。そのあたり、今度は上田先生にお話しをいただきたいと思います。地方創生であったり、今、宮前先生が話されたような課題ということもあると思いますけれど、国の動向等も踏まえて、宮前先生の話を受けて何かありましたらお願いいたします。

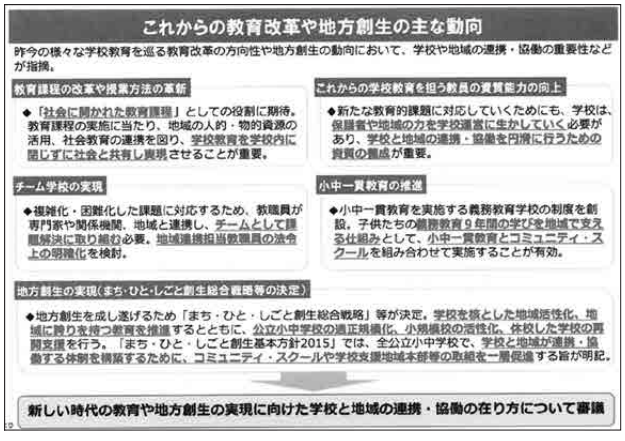
（上田）先ほど農業に携わっている人は4パーセント。昔から比べてみると半分くらいで、その姿が見えなくなったというお話がありました。それは食とか農に限ったことではなくて、社会全体でお互いが見えなくなっているというか、分断されているというところがあるのだと思います。少し前は、学校で勉強して、いい大学とかいい

就職先だとかということがモデルとしてあったのではないかと思うのですけれど、これから世の中、社会がどうなっていくか、大人であっても明確な見通しが持てません。そういった中で、子どもたちが何を学んでいけばよいのか。「生きる力」という言葉を文部科学省は掲げていますけれども、「生きる力」を身に付けていく。そのためには何が必要なのかということを考えた時に、学校の中で学んでいくことだけではやはり難しいだろうということは確実にあります。

これは文部科学省で作成したパンフレットからの抜粋です（【図 4-3】）。今、学校と地域の連携・協働とか、地域とともにある学校づくりというのが必要だと言われていますけれども、何のために必要かと言うと、やはり子どもたちがこれからの社会をどう生きていくか、形づくっていけるかというところ。そのために必要だということだと思います。それは学校、狭い意味での学校の中だけではやはり難しいです。地域と関わり、地域の方々と色々な経験をしていくことで育まれるものだということが、



【図 4-3】



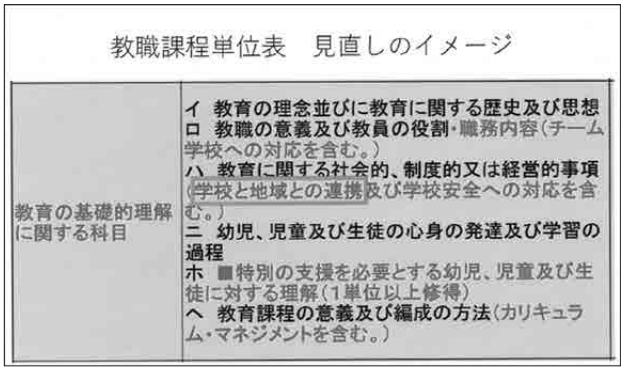
【図 4-4】

この中には書かれています。

資料の中の左側の図ですけれども、学校の役割がかつてと今とでは変わってきているということがあって、これが良いことなのか悪いことなのかといのはすごく難しいですけれど、先ほど触れましたように、社会全体が分断されてきている中で、もしかしたら昔は地域や家庭でゆるやかに育まれてきていたものが、今ではそうはいかない中で、学校に色々な役割が求められていて、それが拡大していっているということがあるのだと思います。では、拡大した役割を学校の先生だけで担うことができるのか。先生と子どもたちの関係だけで育んでいくことができるかといったら、それはやはり難しいです。その中で、やはり地域で生きる方々ともパートナーシップというか、パートナーとして一緒に子どもたちを育んでいくということが、大事になってくるんだと思います。

もう一つ、配布資料があります（【図 4-4】【図 4-5】）。ここにもありますように、教育関係の中でも色々な分野で学校と地域の連携・協働ということが議論され、政策にされようとしています。教育課程、つまり学校で子どもたちが学ぶ内容自体も学校内に閉じないということもありますし、こうしたことも受けて、学校教育を担う教員の方々、学校の先生たちにも、学校と地域の連携・協働のための資質を養っていくことが重要です。では、これをどう具体的に実現していくのか。今まさに議論されている内容ですが、国としての方針が出ましたら、教員を養成している大学でも検討していくことになると思います。その時に、やはり青年部のみなさんが北教大釧路校さんと一緒に取り組まれている取り組みというのは、一つの契機というか、モデルになると考えています。私は今、文科省の中にいる立場ではないのですが、今の担当者もここでの取り組みに注目していると聞いております。

（近江） ありがとうございます。今、お話しいただきまし



教職課程単位表　見直しのイメージ

教育の基礎的理解に関する科目	イ　教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想 ロ　教職の意義及び教員の役割・職務内容（チーム学校への対応を含む。） ハ　教育に関する社会的、制度的又は経営的事項（学校と地域との連携及び学校安全への対応を含む。） ニ　幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程 ホ　■特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解（1単位以上修得） ヘ　教育課程の意義及び編成の方法（カリキュラム・マネジメントを含む。）

【図 4-5】

たことは、国の方の最新の動向だと思います。そこでは、学校の中だけでなく、地域と連携して子どもを育てていくことを、ここまで高く掲げはじめたと。その中で今、上田先生からもありました。文科省の直接のご担当者も、北海道教育大学釧路校と根室地区農協青年部が連携して取り組んでいることに非常に注目しているということでした。そのようなお話を受けて、改めて玉井先生の方から、いかがでしょうか。

（玉井）今、上田先生の方から、文科省の政策でも学校・地域連携を担う教員の養成が課題になっている。教員の資質として、そういったものが求められるようになってきているというお話しがありました。そうした動向に沿ってお話しをさせていただくと、この根室管内は、へき地教育の指定校が95パーセントです。農漁村の中にほとんどの学校があるということです。その農漁村の中にある学校で先生方が学校の中だけで教育をやるという背後に、子どもたちは農業と漁業の中で生活をしているということです。子どもたちの生活を理解しなければいけないということです。

そういうところに勤める教師、特に私どもの大学は日本最東端の大学ですので、本校を卒業した学生の半分以上が、へき地校指定を受けた学校に勤めています。そうした学校に赴任した時にまず求められるのは、地域の親御さんや地域の人たちと交流できるかどうか。こういった力がまず教員に求められます。そういうところに勤めることになるとすると、教師自身がそういう子どもたちの親御さんの産業を理解し、地域の人たちと交流できる力を持っているということが不可欠です。

一般的には、保護者との連携ということは都会でも言われていることですけれど、それがなかなかできない先生が増えてきていると言われています。さらに都会ですと、誤解を恐れずに申し上げれば、激しく教師を批判する親御さんもいらっしゃいます。そういう方たちも含めて親御さんたちをコーディネートしていく力が、これからの教師には求められるようになってくるのだと思います。そうすると、そういう経験をしている先生と、そうでない先生というのは、やはり地域や保護者の皆さんの中への入り方が変わってくるだろうということです。

それから二点目は、教師には転勤があります。必ずしもそこにずっといるわけではありません。しかしそこに育つ子どもたちというのは、地域産業や地域についての知識も得ながら、その中で育つわけです。そこに育つ子どもたちが地域を好きになる。そういうことを、子どもたちに教えなければならないと思います。教師は転勤するからどこの地域でも同じだというのではダメです。子どもたちにとってはその地域が自分の故郷であり、そこで成長するわけです。どこの地域に転勤したとしても、地域を誇りに思う気持ちを子どもたちに教えていくということが必要になってきます。そのためには、教師も地域に入って、地域のことを良く知っておくことです。その地域の子どもたちが地域を誇りに思う。そういう子どもたちを育てる中で、やがて地域の担い手が生まれてくる。色々な地域産業だとか、地域活動を担う大人になっていく。そういう子どもたちを育てていくことが必要なのだと思います。

そして最後、最近の子どもたちの課題として、生活の乱れ、それからネット社会に入り込んでしまうとかといった問題があります。こうした、学校の中ではなかなか見えない子どもたちの姿が非常に課題になっています。学校から帰って農家の子どもでも農家、家の仕事をしない。牛を見てはいるけれども、観光客が牛の前で写真を撮っているのと同じくらいのレベルでしか見ていない。結局は地域を知らない。地域の生活も知らない。そのような子どもたちが増えています。

先ほど宮前の方から学校のカリキュラムという話がありました。本来の学校の先生の役割というのは、教科を教えて、基本的な学習活動をするということが非常に大きい課題です。しかし、そこがなかなか伸び悩む背後には、子どもたちの生活や日常的な関係作りが教師に見えていないということがあります。教師が学校の中で教科を教えるだけではなく、子どもたちの生活指導や日常的な関係の中に入り込んでいく。そのためには、やはり子どもたちの日常に入っていく。そうすると、農家の子どもたちなのに牛舎に入っていないではないか、とかいうことも分かります。

労働というのは、子どもたちの社会的な自立なのだと思います。人間関係作りをするためにも、すごく大事な糧になると思います。けれども、そういう生活の体験や労働というところに、子どもたちが入っていってない。そういったところに踏み込んで子どもたちを指導していくということが、課題なのだと思います。そうすると、子どもたちの学校での学力、さらに体力だとかも含めて、子どもたちの生活丸ごとが、学力の問題にもつながってくる。そういったことも含めて、子どもたちを捉えていくということを考えなくてはならない。そのためには、子どもたちの日常生活の中に入っていく。労働や、関係

づくりの中にも入って指導していくということが、学校教育で子どもたちに教える上でも大事な資質になると思います。以上、我々としても大事な課題だと思っております。

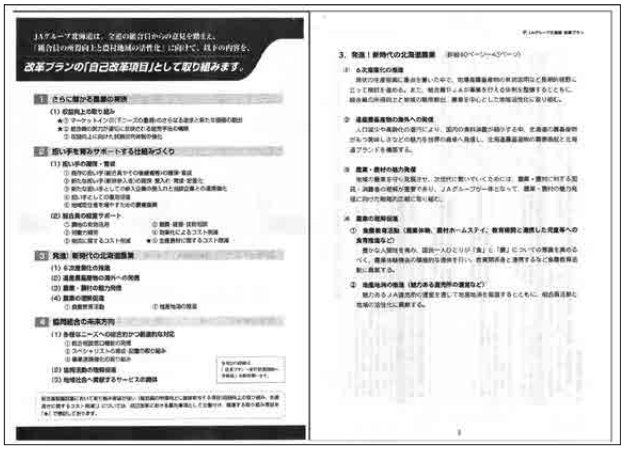
（近江）ありがとうございました。分かりやすいご説明をありがとうございました。せっかくの機会でもありますので、地域でいろいろ活動されている方、いらっしゃると思います。フロアの皆様からもご意見や感想、質問等あればと思いますが、その前に安達さん。食や命の大切さ、農業の大切さということを伝えたいということが、この事業の最初の入り口だったと思うのですけれど、それだけではなく、実は色々な可能性、色々な課題解決に向けたきっかけを作っていたというお話しだったと思います。お話しを受けて、改めて感じられること、ありますでしょうか。

（安達）私も先ほどお話しさせていただきました。農業がまだまだ閉鎖的であるということは、やはり非常にあるんだと思います。実際に生産するということが農家にとって一番大切だということは変わりませんが、やはり、こういったことに取り組んでいかなくてはならないという意識はまだまだ低いと思います。でも、皆さんにそこを意識していただいて、実際に体験を受け入れたりすると、すごいエネルギーももらいますし、地域で本当に支え合いのできる、先進的な地域になるのではないかと思います。

（近江）受け入れるということも大変ということでしょうか。

（安達）体験に入ってくれた学生さんも、「本当に温かくて良い人ばっかりでした」と言うんです。農家というのもやはり閉鎖的で、来る人に対しては「お客さん」という意識がすごく強いように思います。「お客さん」だと思ってしまうと受け入れるのも難しいですが、「家族と同じ感覚の扱いで良いので受け入れてください」という感じでやっています。やはり、やったことがないことに対しては不安はある。でも、やってしまったら、「ああ、こんなんでいいんだ。もっと伝えたかったな」という思いがさらに出てくることがあるということが、今回、この事業を通じて学ぶことができたことです。

（近江）ありがとうございました。皆様のお手元に資料があると思います。「JA グループ改革プラン」ですが、去年（平成 26 年（2014））の 11 月、JA 北海道から提示されたものです[3]。こちらの中に、今回のホームステイの受け入れに関する記述があります。このことについて、JA 北海道中央会根釧支所の副所長であります平田さん、お願いいただけますでしょうか。


JAグループ道南は、全道の組合員からの意見を踏まえ、
「組合員の利益向上と地域の活性化」に向けて、以下の内容を、
改革プランの「自己改革項目」として取り組みます。

【図 4-6】

（平田）JA 北海道中央会根釧支所の平田と申します。私の方からは、今近江さんからご紹介いただきました冊子に基づいて、JA 北海道の改革プランについて説明させていただきます。昨年来、農協を改革すべきという話も政府の方でありました。全道には 108 の農協があります。根室管内には少し動きもありますが、このことも踏まえ、我々北海道農協はきちんと普段から改善もしている。全道でもそのことを踏まえてもう一度組織作りをしていこうという計画があり、それをまとめたのがこの冊子ということになります。

ページをめくっていただきますと、2 ページ目には全道 108 カ所の農協で色々相談をして、これから取り組んでいこうということが掲載されております。1 ～ 4 とありますが、特に 3 番目に「発信！新時代の北海道農業」というものがあります（【図 4-6】）。この（4）の中に、「農業の理解促進」とあります。まさに我々がやっております食農教育活動が、項目として掲載されています（①）。3 ページ目には、このさらに詳しいものが載っておりまして、（4）の中に農村ホームステイも入っております。今日のお話しにもあったような、豊かな人間性を育むですとか、国民一人ひとりが食と農についての意識を高めるですとか、そういった取り組みをしようと。それから教育関係者との連携等とあります。こうしたことをしていこうというお話を、JA 北海道中央会の方では昨年まとめているということであります。

さらに最後のページになりますと、また細かく書いてあります（【図 4-7】）。これはこれからの課題であるとか、真ん中には JA が取り組む内容（例示）、右のほうには連合会・中央会が取り組む内容ということで、ここにもホームステイ等、取り組むということが載っています。全道

④ 農業の理解促進

① 食農教育活動（農業体験、農村ホームステイ、教育機関と連携した児童等への食育推進など）

豊かな人間性を育み、国民一人ひとりが「食」と「農」についての意識を高めるべく、農業体験機会の積極的な提供を行い、教育関係者と連携するなど食農教育活動に貢献する。

背景・課題	JAが取り組む内容（例示）	連合会・中央会が取り組む内容
○概算と絡める消費者の減少 ○栄養バランスの偏りや欠食など食生活の乱れ ○設計食料基本法・食料自給基本計画を策定し食育を推進 ○消費者と組合員の触れ合える関係づくりに対する双方のニーズの高まり ○農村ホームステイ・農業体験等の受入農家の拡大	■消費者を視野に引き込んだ食農教育 ○農村ホームステイ・農業体験等の受入体制を強化する	○農村ホームステイ・農業体験等の受入体制強化に向けた取り組みを支援する ○農村ホームステイ・農業体験等の普及拡大に向けた情報発信を実施する ○消費者と組合員・JAを結びつけるコーディネート機能を設置する
	■学校に出向く食農教育 ○都市部の学校と連携した出前授業等による食農教育活動を実施する	○都市部の学校と連携した出前授業等による食農教育活動を実施する ○北海道教育委員会等との連携を通して都市部の学校と組合員・JAを結びつけるコーディネート機能を強化する
	■牧場・栄養教諭を通じた食農教育 ○地元の学校と連携し牧場や栄養教諭を通じた食農教育を実施する	○北海道教育委員会等との連携を通して牧場や栄養教諭を通じた食農教育実施のための全道的な実施体制を構築する

② 地産地消の推進（魅力ある直売所の運営など）

魅力あるJA直売所の運営を通じて地産地消を推進するとともに、組合員活動と地域の活性化に貢献する。

背景・課題	JAが取り組む内容（例示）	連合会・中央会が取り組む内容
○JA直売所等は地域で生産された農畜産物を地域で消費する「地産地消」の拠点として農業と農業所や地域活性化に貢献 ○商品の品揃えや安定供給、組織運営や収支改善等、運営上の課題の解消化 ○改善で安価な農畜産物を求める消費者ニーズの増さり	○地域住民に選ばれるJA直売所に向けて集客販売の促進、店舗レイアウト、品揃え・安定的給対策、加工品等を含の商品開発、品質管理対策などを強化する ○商品の個数な品揃えと周年供給体制の確立に向けてJA直売所間の連携を拡大する	○集客販売の促進、店舗レイアウト、品揃え・安定供給対策、加工品を含む商品開発、品質管理対策など、JAの魅力ある直売所づくりに向けた支援体制を強化する ○商品の周年供給体制の確立や運営面のノウハウ共有に向けJA直売所間のネットワークを構築する

■ 例示を基に、各地域での協議を踏まえ、取り組むべき事項を設定し、事業計画・中長期計画等に反映する

【図 4-7】

的には本当にたくさんの事業が行われています。たとえば十勝ですと、お聞きするところによると、近江さんを中心に年間 3,000 人の修学旅行生を受け入れているともお聞きします。青年部の方々が中心となってやっているというのが現状ですけれども、ここにもありますように、JA や連合会・中央会等がこれからどのように関わっていくか。また、そこにある課題等も掘り下げながら進めていくことが今後の課題だと思います。一応、ここまでが現状のご報告ということになります。

釧路教育大、それから根室青年部の方々の取り組み、非常に価値ある取り組みであると思います。稲作体験等、農業体験も全国で取り組まれている中で、やはりハードルの高いものだということも承知しています。その一方で、受け入れ側も含め、学生さん、子どもたちの変化というものも、確実にそこにあるのだと思います。ですから、今後どのように JA、連合会・中央会がフォローできるかということが課題になってくるのではないかと思います。本日、お話をうかがわせていただいておりますと、やはり農業・食・学校教育についても色々な批判もあると思いますが、コンセプト・マップといったものも拝見して、酪農に対してこういう認め方があるのか、農村・地域についてもこういう認め方があるのか、ということを非常に感じました。ですから今後とも、教育大と青年部の取り組みについても、お互い高め合うような形で協力できればいいなと思っておりますので、よろしくお願いします。

（近江） ありがとうございました。このようなプランを改めてご提示いただいたこと、非常に心強く思います。私は株式会社という形で関わらせていただいております。これは私の勝手な主観なのですが、協同の理念というようなところもあわせて、ぜひ JA さんの方で色々な活動をますます引っ張っていっていただけたらと思いました。

もうお一方、フロアから。すみません、今回の青年部のこの事業にもご協力をいただいている根室地区農協女性部の畠山会長さんがお見えだったと思います。ぜひお一言。この青年部事業に関わって、また息子さんがファームステイの受け入れもされたとうかがっております。その中で気付かれたこと、一言でもよろしいのでお言葉をいただけたら嬉しいのですが。

（畠山） 根室地区女性部連絡協議会の畠山です。女性部としては調理実習という形で、去年・今年と関わりを持たせていただきました。また去年、息子が女の子 2 人を受け入れさせていただきました。これまでも小学生とか、高校生とか、2 日間、3 日間といった期間で受け入れてきたことはありましたが、1 泊という短い期間で受け入れをするのは初めてで、この短い期間で何を伝えることができるだろうと、自分自身不安でした。けれども教育大学の学生さんは、みなさんきちんと目的をもって参加されていましたので、色々質問をされたり、自分なりに感じられたりしていて、有意義に過ごしていただいたのではないかと思っています。これからもいろんな農家の方が 1 泊という短い期間でも何を飾ることもなく、自分の家の酪農を見せるという面で参加していただきたいと思いました。以上です。

（近江） ありがとうございました。今、畠山会長の方から学生さんを受け入れてという話がありました。今日、実は実際に民泊体験に参加された学生さんもいらしていると思いますが、どなたか学生さんからも一言。民泊体験をしてみてということだけではなく、先ほどのパネラーの方たち、上田先生、玉井先生等のお話しも含めて聞いて感じられたこと、これから先生になるということもあると思いますが、いかがでしょうか。

（坂之下） 北海道教育大学の坂之下といいます。別海町の出身で、実家は酪農家をしています。私は今年、酪農家民泊体験実習を受講しました。今日の話を聞いて色々考えたのですが、子どもたちに伝えていきたいという時に、どうやったら伝わっていくだろうかということを考えると、自分の実体験を踏まえてという面で、やはり民泊体験が一番良いのではということを考えました。それと、今日のお話しの中にもあったと思いますが、伝えたいことというのは、ただ体験させるだけでは「伝える」ことはできても、「伝わる」ことは難しいのかなと思いました。当たり前のことだとは思いますが、事前に必要な知識も与えたり、目的意識とまではいかなくても、どうし

てこれから体験をするんだろうということも子どもたちに考えさせてから体験をしてもらわないと、学びも気付きも少なくなってしまうように思います。私が教員になった時には、事前学習ということも含めて、子どもたちに民泊体験をさせたい。民泊体験は地域との関係もあって、難しいこともあるのだと思います。でも、そういったところも含めて実現できたら、より良いものになるのではないかな、と思いました。

（近江）ありがとうございました。伊藤さんよりさらに身近な方、学生さんがいらっしゃったと。まだまだお話しをお聞きしたい、掘り下げたい、展開したい部分もありますが、残念ながら時間になってしまいました。パネラーのみなさんから会場の方に一言ずついただいて、パネルディスカッションの方、終了したいと思います。上田先生から、よろしくお願いします。

（上田）ありがとうございます。色々な思いがありすぎて、短くお伝えするのは難しいですが。農業に携わっている人も、学校に携わっている人も、あるいは保護者さんも、それぞれの悩みとか課題とか、孤軍奮闘していても、なかなかな難しいのかなということもあると思います。そういう中で、この地域のように手と手を取り合って、子どもたちや次世代、命といったものにみんなで向き合える関係というのは、これから一番大事になってくるのではないかと考えています。私も自分の今の立場とか、文部科学省へのフィードバックも含めて、地域としてそんな風に携わっていけたらと思っています。

（玉井）本校は教員養成ですけれど、とりわけ道東に位置するということで言えば、道東の地域に責任をもつということ。根室管内から教員になろうという方はこれまで少なかったですけれど、ぜひ根室管内から、教員になる方を送り込んでいただいて、また根室管内に帰ってそういう教育をする。地元のことをよく知っていて、そして地元のことを愛する。そんな教師に育てていきたいと考えています。よろしくお願いします。

（宮前）今日はありがとうございました。上田先生のお話しの中にもありました。学校と地域、それと子どもたちの学びと社会が分断されている。だからこそ学校・地域連携ということも言われているのだと思います。でも、特に都市部の方でそうなのではないかと思いますが、学校・地域連携というと、地域の方々がどう学校に関わりを持っていくか、地域が学校にどう貢献していくかということばかりに目が行ってしまって、では、学校は地域に何をしてくれるのだろうか。私はいつもそんなことを考えてしまいます。そういった状況の中で、私といたしましては、学生たちにはぜひ地域に貢献していく先生になってほしい。そういった思いで教員養成に関わらせていただいています。

その中で私がよく学生に言っているのは、もしかしたら教員養成としてはあり得ない話なのかもしれません。甘えることができる人になりなさいということです。教員として小学校で将来、地域に貢献していくことのできるような教育を行っていく時、やはり地域の方々に頼ったり、甘えたりしなければならないようなこともあるのだと思います。学校の先生だけでは教えることができないことというのはどうしてもあって、他の人に甘えたり、頼らざるを得ないところもでてくる。そういうことも含めて、民泊体験を通して学生は理解を深めていってくれればと思っています。われわれは、将来、地域に貢献する学校の先生を育てているつもりです。民泊体験もそうですが、私も含めて、学生たちも皆様に甘えさせていただいて、さんざんご迷惑をおかけしているのだと思います。大学としても地域の皆様に甘えさせていただきながらとなるのだと思いますが、地域に貢献する教員を育てて行きたいと考えております。よろしくお願いいたします。

（半澤）今日はどうもありがとうございました。私の専門は心理学です。実は今日、皆様が私の話を聞いてどういう表情をされるのかを見ながら、お話しさせていただいていたのですが、色々勉強になりました。今までお話を聞いて思ったことがあるんですが、このようにシンポジウムを開催するということ自体、民泊体験がまだ特別なものだということですよね。特別なものだからこそ、改めてシンポジウムを開いて報告してということになるわけです。それがシンポジウム開くまでもない、当たり前のことに今後なっていくわけです。どうしてわざわざシンポジウム開くのかというくらいにまで。こういったことがそこまで日常的なものになっていくと、よりよい世の中になっていくのではないかと思います。今日はどうもありがとうございました。

（安達）本日はありがとうございました。冒頭のご挨拶の中でも申し上げましたが、今日のこのフォーラムで、みなさんとも色々なことが共有できたのではないかと思います。今年、農協で北海道大会というものがあり、その中で魅力のある農業・農村の発信ということがテーマになりました。では農業農村の魅力って何だろうということになり、農家が魅力だと思っていることでなければ魅力の発信ということにはならないのではないか、という

話をすることがありました。都市部でも農村部でも、地域の魅力というものを知らなくては一緒なので、なるべく自分たちで発信することもそうですが、みなさんと手と手を取り合って、地域で子どもたちを育てていくということがテーマだと私は思いました。今日は本当にありがとうございました。

（近江）パネラーのみなさん、ありがとうございました。上田先生、玉井先生のお言葉にもあったと思います。この取り組みには大きな可能性があると、改めて感じました。一部の人だけでなく、もっともっと多くの様々な立場の方たちが関わりながら、末永くますます発展していくことを期待したいと思いますし、私も微力ながらお手伝いしたいと考えております。本日はどうもありがとうございました。

【注】

(1) パンフレット全編については北海道農協青年部連絡協会 HP（http://jayouth-hokkaido.jp/homestay/）参照のこと。

(2) 注 (1) に同じ。

(3) パンフレット全編については JA 北海道中央会 HP（http://www.ja-hokkaido.jp/member/generalplanning/590/）参照のこと。

閉会挨拶

玉　井　康　之
（北海道教育大学釧路校教授・キャンパス長）

このフォーラムに参加させていただいて、改めて教員養成大学が果たす役割、そして地域が教員を育てるという役割の重大性を感じました。地域・学校、そしてそれをとりまく地元の方々の力が合わさってこそ、やはり本当の教育活動ができるのだということを、このフォーラムを通じて確信いたしました。

農業の専門家は農家の皆様、コーディネーターとしては近江さんのような方がおられる。そして私たちは学校教育に携わり、またそこに携わる教師を育てる。それぞれが、それぞれの専門家であるわけです。そうした専門家が力を合わせ、その中で新しいことができるのだと思います。

今後とも力を合わせながら、作り上げていくこと。我々としてはこのことをお約束させていただいて、閉会のご挨拶とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。